
宝良の日々

虚言の騙り手

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宝良の日々

【Nコード】

N7542E

【作者名】

虚言の騙り手

【あらすじ】

背が低くて、声が高く、童顔、女顔。紅い髪を長く伸ばした彼女
募集中の宝良雛^{たからひな}、高校二年生。そんな彼の日々の記録……。 「彼
女欲しいなあ……。」

ぶろろーぐ

緩やかな変化（前書き）

書きかけの作品があるにもかかわらず、衝動に任せて無謀にも新たな作品に手を出してしまいました。もう一つの作品以上に不定期的で遅い更新になると思いますが、よろしく願います。

ぶろろーぐ

緩やかな変化

本日も晴天なり、というか花粉のせいで春の気持ちいい陽射しが台なしな今日この頃、皆さんいかがお過ごしでしょうか？

新しい環境にそろそろ馴染めたでしょうか？何事も最初が肝心ですからあまりはっちゃけ過ぎるのは駄目ですよ？はっちゃけ過ぎるとろくなことはありませんよ。例えば・・・

「天誅っ！！」

「ぶべらっ！！」

あのように宙を舞うことになりますから。

「惜しい、六十五メートル。記録まであと七メートルだったな。」

「彼らもよく飽きませんよね。」

もはや日常の一部になっている光景に親友の八夜九陽君ややくようと僕はそれぞれのコメントをしました。

「あれもあいつらの愛情表現なんだろう。俺ら常識人には理解しがたいがな。」

「仲がいいことはいいいことです。僕ら常識人には理解が出来なくても。」

「待ったあああ！！今の発言には異議を唱える！！」

先程、人を吹き飛ばしたほうである女性、曆^{こよみ}皐月^{さつき}さんが猛烈な勢いで僕らのもとに来ました。彼女がいたところは離れていて、小声で話していたのに関わらず聞こえるとは相変わらずの地獄耳です。

「異議と言われても、何も間違っていないだろ？」

「間違いだらけだ！まずはアレと私と一緒にするな！あんなのと一緒にされるのは不愉快極まりない！それにお前らが常識人とは冗談にもならんぞ！」

失礼なことを言わないでもらいたいです。僕と九陽君はまっとうな一般人なのに。

「しかし、アレはお前の半身のようなものだろ？」

「確かにそうだがっ！私の人生最大の汚点とは一緒に扱われるのは納得がいかん！！」

「・・・さっきから俺の扱いが酷くね？」

「あ、もう復活したんですか。」

「さりげなくお前もひでえな、コノヤロウ。」

顎を真つ赤に腫らして僕に話しかけてきた、曆^{こよみ}葉月^{はつき}君は僕が応えてあげたのに恨めしげな目で僕を見ます。

そんな視線から僕を守るように九陽君と皐月さんが葉月君と僕の間立ちます。

「愚弟、あまり雛に話しかけるな。馬鹿がうつったらどうする。」

「汚物、雛を見るな。雛が汚れる。」

あ、二人が言ってるのは僕のことです。僕の名前は宝良雛^{たからひな}といいます。こんな名前ですがれっきとした男です。背が低くて、童顔で、声が高めで、女顔で、髪が腰まで届くほど長くても真正正銘の男です。

「俺の扱いが酷すぎる！？つか、九陽なんか汚物って既に人扱いじゃねえな！え？姉貴、何だよ？その何をいまさら、っていう顔は！？」

葉月君が喚いています。二人ともちっとも気にしません。むしろ、視線が冷ややかになっていきます。

このまま彼が二人にウザイという理由でボコボコにされるのを見るのもいいですが、それで公共の道路を汚すのは忍びないので二人を止めることにしました。

「汚物は酷いですよ。ちゃんと名前と呼んであげましょう。」

「雛、俺はお前を信じてたぜ！」

「汚物が可哀相じゃないですか。」

「汚物以下だった！？」

「「それもそうだな。」」

「しかも納得しやがった！」

葉月君がうるさいですが、とりあえずは道路が汚れることはなさそうですね。

「ところで、今度は葉月君が何をやらかしたんですか？言わなくても何となくわかりますが。」

「察しの通り、またナンパだ。」

頭が痛いと言わんばかりに溜息を吐きました。

「相変わらず懲りないのか。」

「男が女を求めて何が悪い！」

「それ自体には文句はない。しかし！やり方に問題がある！」

「何がいけないって言うんだよ！ただお茶に誘って、キスをねだって、夜の話しを持ち出したただけだろ！？」

「問題がおありだ！この愚弟！お前と双子という事実だけで恥ずかしい！！」

言い忘れてましたが、彼等は双子です。二卵性なので性別は違いますが、顔立ちはそっくりです。違いと言えば、皐月さんが古風な感じな性格で黒髪をポニーテールにしているのに対し、葉月君は残念な性格で金髪を馬鹿っぽくツンツン立っているとこでしょうが。

あ、ついでに言うと九陽君もイケメンです。知的な眼鏡とクール＆ミステリアスな雰囲気な女性にはたまらないらしいです。

周りがこんなに美男美女なのですが、僕は『亡霊』なんて呼ばれていたりします。

そんなふうに呼ばれるのは僕の容姿に原因があります。

何しろ僕の顔は髪の毛に覆われて見えません。しかも、その髪が深紅で肌も病人のように白いものですから血染めのお化けっぽく見えます。おかげ夏休みはバイトに困りません。何故、顔を隠しているかというと、単に恥ずかしいからという一言に尽きます。恥ずかしがり屋な僕はこうしているのがとても落ち着くのです。

『亡霊』というあだ名も主に使われるのは夏だけです、いじめにもあっていないですよ？むしろ、可愛がられています。

「あ、そういえば。」

あだ名で思い出しました。鞆を漁って物を取り出します。

「はい、今日の分です。右のが九陽君の、左が皐月さんので、今、踏みにじってるのが葉月君のです。」

「う、またか……。」

「すまん。」

「何で踏むんだばぁー!?」

二人に物を渡して、足元にすがってきた葉月君に蹴りを顔面に突き刺しました。

「鼻がつ！鼻がぁぁー!!」

何故か葉月君が悶えています。いつものことなので放置します。

「臯月さん、人の好意を邪険にしたら駄目ですよ？九陽君ももらうだけでもらって無視するのは駄目です。」

「しかし、顔も分からない男にこのようなものをもらっても困る。」

「もらえるだけ有り難いと思います。僕なんか毎回もらうのは他の人宛てのラブレターばかりで自分のはもらったことがないんですから。」

「『仲介人』様も恋がしたいか？」

「当然です。せつかくの青春を彼女がいままま過ごすなんて御免です。」

九陽君達と一緒にいることが多い僕は何時からか彼等へのラブレターを預かることが多くなり『仲介人』と呼ばれるようになってしまいました。

「だ、そうだが？」

「なっ！な、ななな何故そこで私に振る！？」

「近頃のお前が男を振る理由が」

「言っなあ！！頼むっ！それだけはっ！」

「・・・そこまで動揺すれば言っているようなものだが。」

「九陽君は皐月さんが告白を断る理由を知ってるんですか？」

「・・・もはや感心するな。」

九陽君は呆れたような顔で、皐月さんは顔を赤くしてホツとしたような残念なような複雑そうな表情をしています。

「ところで、今日はどうする気だ？」

「うーん、情報収集したいところですが大家さんに呼ばれてるので遠慮します。」

「そうか。ところで、いい加減にテレビぐらい買ったらどうだ？何なら俺がゆずるが？」

「あっても見る暇がないですからね。お金もないですし、無駄な出費はさけないので。」

両親もいない身で一人暮らしは大変です。父親の友人である大家さんの好意のおかげで何とか住む場所に困っていませんが、出来る限り自力で頑張りたいので携帯を除き、テレビはもちろん、娯楽品は部屋に一つも置いてないですし、新聞もとっていません。そのせいで情報には疎くなってしまうので九陽君や葉月君の家で情報収集をしています。

「そっぴや、今朝のニュースなんだけどな。」

ゴキブリのようで復活した葉月君が思い出したかのように汚れたラブレターをはたきながら僕を見ます。

「お前のお気に入り女優が離婚したらしいぞ？」

「・・・本当ですか？」

「ああ、突然のことだから随分騒がれてたぞ。」

「今朝のこととなると、ひかがみきれない燈鏡紅のことか？・・・雖はああいう女性が好みなのか。」

燈鏡紅とは、若いながらも国民的な人気を誇る女優で十年前に芸能界入りして、その二年後に十五歳年上のマネージャーと電撃結婚。容姿端麗、才色兼備であり天は二物を与えずという言葉を地で破り、話題性のことかかない女優で、舞台、ドラマ、映画、様々な方面で活躍し、その実力を遺憾なく発揮して国民だけでなく、同じ芸能界でも人気が高い。

僕は彼女の一ファンであり、彼女に関する情報だけは細かく集めている。記事もスクラップしているほどだ。

「好み、というのはまたちょっと違いますけど、大好きではあります。」

「どうだか？燈鏡紅のニュースのときだけ見る目が違ったじゃないか？え？」

いやらしい顔つきで肩を組んでくる葉月君を適当にあしらいながら、その後も雑談を交わしながら歩いて、みんなと別れると一人、町外れへと足を向けました。

~~~~~

皆と別れて二時間、街から離れて建物が少なくなってきたところに、僕の住まいであるアパートはあります。

お世辞にもというか、どう見ても綺麗に見えない築百年以上はたっているであろう、さびれた外観の今時珍しいトタン屋根のボロアパートには外壁に蔓が絡みつき一種の心霊スポットのようにも見えないこともありません。外見の期待を裏切らず、設備もボロボロで雨の日は雨漏りをしますし、水道もある程度の頻度で壊れますし、電気もたまに通じないことがあります。かろうじて、携帯の電波が届くのが幸いです。立地条件、家屋の老朽化がひどすぎるためにここには僕と大家さんしか住んでいないのが現状です。

「お帰りなさい、雛ちゃん。」

「ただいま。大家さん。」

アパートの前を無意味に掃除している黒い長髪に黒いシャツ、黒い手袋、黒いロングスカートに黒い靴下を身につけ、白い肌と対照的な全身黒尽くめのこの女性が僕の父さんの友人でこのアパートの大

家である大家瓜おおやうりさんです。僕を雛ちゃんと呼んで、父さんが生きていた頃から僕を可愛がってくれていた年齢不詳の美人さんです。ちなみに名前が嫌いらしく瓜さんと呼ぶと、羅刹のごとく恐ろしくなるので絶対に呼ばないようにしています。たまに何故か熱の籠った目で僕を見ているのですが、それ以外は特におかしなところのないいい人です。

「早くお部屋に行きなさい。」

「え？僕に用事があるんじゃないんですか？」

「用事は私じゃなくて部屋で待つてる人があるのよ。早く行ってあげなさい。もう三時間近く待つてるわ。」

「はい。じゃあ、また後で。」

「待つて。」

僕が部屋に行こうとすると、大家さんに引き止められました。

「何か忘れてない？」

「あ、そうでした。」

僕はしゃがんでくれた大家さんの頬に顔をよせてキスをしました。父さんが亡くなってからお金に困っている僕がここに住む代わりに色々と変な条件を提示されて、このキスもその条件の一つでした。行きと帰りの際に大家さんの頬にキスをする、この条件には最初の頃は照れていたけど、今では自然に出来るようになりました。慣れつつ恐ろしいですね。

「はぁ・・・。」

大家さんがうつとりと息をしておりましたが、僕はそれを気にせずに自分の部屋に向かいました。

誰が来ているのだろうかと思いつつ、部屋のドアを開けると女物の靴が玄関にありました。ドアを開けた音が聞こえたようで部屋の奥から人が来る気配がします。

「雛？」

そこに現れたのは茶色い癖のある髪に柔和な顔立ちで大家さんに負けず劣らずな美人でスタイルは大家さんよりよろしいだろうという女性でした。

「あれ？何でここに？」

「雛！」

抱きついてきた女性に押し潰されそうになって、頑張つて堪えようとしてみるが勢いが強すぎて押し倒されてしまいました。

「ゴメンね。ゴメンね、雛。もう一人にしないから。私が一緒にいるからね。」

涙声で早口にまくし立てる女性の顔をもう一度確認すると、やっぱり自分の知る人物に間違いありません。

「何でここにいますか？母さん？」

僕の母、  
燈頼<sup>ひかりより</sup>琴音<sup>ことね</sup>、  
改め芸名、  
燈鏡紅<sup>ひかりかがみこう</sup>がそこにいました。

ぶろろーぐ

緩やかな変化（後書き）

思いつくままに書いていくので矛盾した点や無理矢理な点、適当な点や無駄に凝ってる点などが目立つと思いますが、どうかご容赦ください。ご意見、ご感想のほうもどしどしお願いいたします。ご覧頂きありがとうございます。

## ぶろろーぐ・2 母の事情

私と目の前の人物、芸能界に入ってから私を支えてきた夫の間に重い沈黙が続いている。

「・・・考え直しては、くれないのか？」

「ごめんなさい。知ってしまった以上あなたとこれ以上一緒にはいられないの。」

彼と私の間にあるテーブルにはすでに私の名前が書かれた離婚届。  
「・・・そうか。」

彼がおもむろにペンをとり、書きはじめて判を押した。

「これは私が出しておくから。・・・お世話になりました。」

「・・・許されるとは思ってない。だが、それも君のことを思っていることだ。君を騙すような形になってしまったがそれだけは信じてほしい。」

「わかってる。あなたはマネージャーとして正しいことをした。私があなただを好きになったのは私のせい。・・・知ってしまったぐらいいですぐにあなたから離れてしまう現金な私が悪いのよ。」

それが私達が夫婦としての最後の会話だった。

そして、翌日、離婚会見のあと、すぐに私は愛しい家族のもとに向

かった。

~~~~~

夫の最後の親切で彼等の住所を教えてもらい、私はその街にやってきた。

来る途中で何度か私を見ている人がいたが、変装もしていたし、まさか前の晩に離婚会見を開いていた人物がこんなところにいるとは思わなかったのだろう。

おかげで私のことに気づいた人はいなかった。

タクシーを拾ってたどり着いた先は町外れのボロアパートだった。

「・・・ここに、いるのね。」

私が緊張で身を固くしていると扉の一つが開いて中から全身黒ずくめの女性がでてきた。

「瓜・・・？」

こちらに気づいたらしい女性は高校時代の友人である瓜のようだ。

昔からああいう格好なので久しぶりに会ってもすぐに分かった。

「久しぶりね。琴音。離婚したってニュースを見て、来るんじゃないかと思ってたわ。」

「じゃあ、やっぱりここに鏡治きやうぢと雛ひながいるの？」

「あなた……。そう……。だからだったのね……。」

彼女は悲しげな瞳で私を見た。

その表情を見て私の心臓は締め付けられるような痛みを覚えた。

「どういう、意味……？」

聞きたくないと頭のどこかで叫ぶ自分がいたが、私は震える声で何とか言葉を発することができた。

「……。宝良君は八年前に死んだわ。」

「ッ!!」

瓜の言葉に私は目の前が真っ暗になったような錯覚を起こした。

「……。死ん、だ？ 八年も前に？……。八年前と、いえば、ちょうど私が結婚した……。！ ま、まさか……。」

「……。宝良君が死んだのはあなたが結婚する前、それもただの交通事故よ。だから、あなたが今、考えているようなことじゃないわ。」

その言葉にホッとすると同時に怒りが込み上げてきた。

「どうしてまぎわらしい言い方を!!」

「雛ちゃんは生きてしまったせいであなたの結婚を知ってしまったけどね。」

その一言で急激に怒りの炎が消えていき、再び暗闇へと叩き落された。

「・・・雛ちゃんは自分を必死に育ててくれた宝良君が死んで悲しんだわ。ずっと、ずっと、それこそ昼夜問わずに泣いていて食べることも忘れて泣いた。その間に私が色々な手続きとかは済ませて、何とか雛ちゃんを説得してお通夜の準備をしていたときよ。・・・あなたの婚約が報じられたのは。」

「う、うそ・・・。」

「私だつて驚いたわ。こんなタイミングで婚約するなんて神様の悪戯とは思えないくらいに最悪のタイミングだもの。」

何でそんなときに結婚してしまったのだろうと私は昔の自分を止められるものなら止めたいと心の底から思った。

「ねえ、琴音。人間の一番怖い表情ってどんなものだと思う?」

いきなりのわけの分からない質問に私は答えることは出来なかった。

「私は怒りに染まった顔でも、憎しみに染まった顔でもなく無表情だと思っわ。・・・あなたの婚約を知った瞬間に感情というものが全て消えたあの雛ちゃんの顔を私は一生忘れられない。」

瓜は言いながら悲しそうな目でその当時のことを思い出すかのよう
に目を細めた。

「それまで目の端に涙を溜めていたのが嘘のように引いて、しゃく
りあげていたのにそれも止まって、声にも感情の起伏がなくなつて、
通夜の席でもずっと無表情でやりとおしたわ。もっとも、周りはその
れを宝良君が死んだショックだと思っていたみたいだけど・・・。」

瓜のいつもは柔らかい視線が今だけは刃のように鋭く尖り、私に向
けられる。

「ハッキリ言わせてもらえば、私はあなたが嫌いよ。雛ちゃんをあ
んな目に合わせておきながら今更ノコノコ会いに来て何の冗談のつ
もりって言いたいくらい。」

「し、知らなかったの！わ、私は鏡治が私を捨てたって聞いて、そ
れで、雛も連れて行って、二度と会わないって言ってたって聞いて、
それで、」

「聞いただけで、本人に確かめようとしなかったんでしょう？」

「そ、それは・・・。」

「結局、あなたは自分が傷つくのを恐れて逃げたのよ。そんな自分
優先の人間がまた雛ちゃんを傷つけることがないって信じられると
思う？」

瓜の言葉の一つ一つが私の胸に突き刺さり、後悔の念が強くなって
いく。

「私、は……。」

ごちゃごちゃに乱された心でそれでもなお揺るがない想いが口から零れ落ちる。

「それでも、雛に、私の子に会いたいの！お願い！会わせて……！」

頬に涙が伝うのを感じながら必死に瓜に懇願する。今、あの子との関係まで断たれてしまったら私はずっと私ではいられなくなってしまうだろう。そんな想いが心の何処かにあった。

そんな私に瓜は背を向ける。そのことに私は絶望を感じて、恥も外聞も投げ捨てて、声を上げて泣きそうになったとき

「……雛ちゃんの部屋は私の部屋のすぐ隣よ。今は学校に行ってるけど、あなたが来ると思って、私が用があるって呼び出しておいたから学校が終わればすぐに帰ってくるはずだし、鍵は開けて置いてあげたから部屋で待ってなさい。」

「え……？」

私は瓜の言葉の意味を一瞬理解できずに呆然とした。

「……私がどれだけあなたを嫌っても、雛ちゃんにとってはあなたは大事で、大好きな母親なのよ。だったら、会わせてあげたほうが雛ちゃんが喜ぶから私は我慢するわ。」

「ありがとう！ありがとう！」

私は嬉し涙を流しながら何度も瓜にお礼を言って、彼女が自分の部屋に戻った後に雛の部屋で愛しい息子が帰ってくるのをどんな風に謝ろうか必死に考えながら待った。

実際に帰ってきてその姿を視界に収めたときには考えていたことなどすぐに頭から吹き飛んでただひたすらに謝ることしか出来なかったけど・・・。

特に今後の展開に関しては考えていない完全な思いつきの作品なので読者の方々に満足していただけるかどうか不安で仕方がありませんが、書く以上は出来る限りいい作品に仕上げたいと思います。

第一話 母と子

いざこうして向かい合ってみると、改めてこの人が美人であることを再認識させられます。

こうして気まずそうにこちらを見ているその姿もまた綺麗だと思っ
てしまうのは息子の鼻肩目を除いても間違っではないはずだ。

「ひ、雛？」

「何ですか？」

僕が聞き返しても視線を逸らすばかりで会話が進みません。仕方ない
のでこちらから話しかけることにしました。

「母さんはどうしてここに来たんですか？」

「あ……。その、嫌、だった？」

何を言っているのでしょうか？僕は母さんに会えて嬉しいのにどうし
てそんなふうに思うのでしょうか？

「いえ、むしろうれ」

「会いたくなかったよね。そうよね。私みたいな酷い母親失格、う
うん、女としても最低な人間なんて顔も見なくなかったよね。あ、
気を遣ってくれなくてもいいのよ。私みたいな最低な女に雛の優し
さを受ける権利なんてないの。むしろ、雛は私に対して憎悪を向け
られても仕方のないでしょうもなく駄目で愚かな存在だってちゃ

んと分かつてるわ。難を待っている間に何百通りも想定したからどんなことを言われても大丈夫なように覚悟は出来てるから思う存分言いたい事を言っで。」

「……………凄まじくネガティブ思考です。」

父さんや大家さんに母さんは一度思考が暴走するとどんどん深く考え込んでしまう人だとは聞いていましたが、まさかここまでとは思いませんでした。

それに覚悟は出来ていると言いながら目の端に涙が溜まって今にも泣きそうです。

「そう……。喋りたくもないほどに私が嫌いなね。それとも今更のこのこと顔を出した私に呆れ果てているの？」

どうしようかと困っているとその沈黙を変な方向に解釈させてしまったようです。

「えっと、そういうことじゃないんですけど。」

「じゃあ、怒ってるの？軽蔑してるの？憎んでるの？それとも」

「てりゃっ。」

母さんを黙らせるためにハリセンを取り出して頭をひっぱたきました。

え？何処から出したか、ですか？

それは企業秘密です」

そんなことより母さんがまた何か言う前にまずは誤解を解かないといけません。

「まず大前提です。僕が母さんを嫌うなんてあり得ません。」

「嫌いを通り越して更に深い負の感情を持ってるんだよね。」

「ていつ。」

未だにネガティブ思考の母さんの頭にもう一度ハリセンを叩き込みました。

「いい加減にしないと怒りますよ。」

「やっぱり怒ってるよね。」

「とりゃあ。」

さつきより強めに頭を引っぱたきました。

「いいですか？よく聞いてください。僕は、母さんが、大好きです。嫌うとか憎むとかそういうことはぜえーったいありませんので安心してください。」

子供に言い聞かせるように重要な部分を区切りながらしっかりと伝えます。

「・・・本当に？」

「事実です。」

「で、でも、私の婚約を知ったときに、その……。」

年上とは思えないほどうろたえた様子でこちらを恐る恐る伺っています。

「というか、大家さん……。余計なことは話さないで下さい。」

「それは、まあ、あのときは子供でしたし、父さんが死んだばかりでまだ心の整理がついていないときに知って、その、少なからず憎く思いましたけど」

「やっぱり……。」

「思いましたけど、今はちゃんと整理がついてますし、そもそも父さんが母さんにそう思わせるようにしたんですから母さんがそういうことをしても文句は言えないわけですし、母さんが幸せになれるなら僕も父さんも言うことはありません。」

「え……。？鏡二が？」

「あ……。えっと、まあ、この際だから言っちゃいますと、父さんが母さんを捨てたのとか二度と会わないって言うのは、父さんがマネージャーさんに頼んだことなんです。」

こうして会いに来たということは何かしらの事実を知ってきたのだろうと思い、父さんも亡くなった今、別に話してもいいかと真実を口にしました。

「当時母さんの人気が出始めた頃に父さんは思ったんですよ。恋人である自分と血は繋がってないとはいえ二人の子同然である僕がいたら邪魔になっちゃってしまうんじゃないかって。父さんは母さんが小さい頃から女優になることに憧れていたのを知っていましたから、自分達がやっとなやみそうなのその夢の足枷になることが嫌でマネージャーさんと相談して自分は身を引いたんです。・・・愛していた母さんの夢を誰よりも応援していたのは間違いない父さんです。いつもいつも母さんの話題が報じられる度に一喜一憂して、幼いうちに母さんと離れてその面影もろくに覚えていない僕に母さんがどういう人だったのか感情を込めてたくさん話してくれて、その度に父さんが母さんのことどれだけ思っているのか伝わってきました。」

本当に父さんはいつでも母さんの話をするときは嬉しそうで、誇らしそうで、懐かしそうで、どこか寂しげでした。

愛していても母さんのために離れていることが自分でやったこととはいえ、やはり満たされないものがあつたんだと思います。

「・・・母さんが幸せになつたのに僕が憎むなんてことは今は絶対にありません。父さんと同じで僕も母さんが大好きで、第一、いえ、父さんがいますから第二のファンですから。」

僕には父さんの想いを超えることは出来ません。それでも母さんのことは人一倍思っているということには自信があります。

「難あ・・・、鏡二い・・・。ごめんね、それと、ありがとお。」

母さんの眼からとうとう涙が溢れてきました。

今話しかけるのも躊躇われるのでとりあえず落ち着くまで待つことにしました。

それから三十分近く泣き続けたあとやっと落ち着いてきて頃合を見計らって声をかけました。

「落ち着きましたか？」

「ええ。みつともないところを見せてごめんね。」

眼を赤く腫らしながらも気丈に笑みを浮かべてくれました。

「いえ、気にしないで下さい。」

「そう……。そういえば、怒ってないならその他人行儀な話し方はやめてくれない？あと、顔もちゃんと見せて欲しいな。」

「他人行儀というかこれが地の話し方なんです。それに顔のほうは恥ずかしいからあまり見せたくないんです。」

「恥ずかしいって、せつかくの可愛らしい顔なのにもったいないじゃない。」

「でも、髪がこの色で眼もあれじゃないですか。」

「私は綺麗だと思うけどな。」

「綺麗かもしれないですけど、昔は物珍しさで視線を集めすぎたんです。そのせいか父さんが顔を隠すようになって。」

昔、まだ素顔を晒していたころはこの容姿のせいでよく視線を集めてしまい、周りの子はたいてい僕の髪を撫でたり、眼をじっと覗き込んだり、ボーっと顔全体を眺めたりする人がたくさんいました。

大家さんに言わせれば二十四時間見ている飽きないということです。

「母親なんだから私には見せてくれてもいいじゃない。それに成長した雛の顔をちゃんと見たいな。」

「・・・まあ、母さんならいいでしょう。」

大家さんにも父さんにも素顔は見せないようにきつく言われていたけど、母さんならいいかと思いい顔を隠していた髪を掻き揚げて素顔を晒しました。

普段は髪に隠れていますが、僕の眼はオッドアイで蒼い左眼と深緑の右眼になっています。

父さんいわく、ルビーのような髪、サファイヤとエメラルドの双眸、真珠のように白い肌。宝石を集めた一種の芸術だ。と、大袈裟に褒めてくれたこともありました。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「母さん？」

母さんは僕の顔を見たまま硬直してしまった。

そつえば、前にうつかり皐月さんに素顔を見られたときもこんな

ふつに硬直して

「ッ!」

こんなふつに顔を一気に真っ赤にしていました。

「母さん？」

今度は髪を下ろして母さんに話しかけます。

皐月さんのときもこうしたらやっと気が付いてくれたので多分これで大丈夫だと思うんですが。

「え、あ、ひ、雛？」

「どうかしましたか？ やっぱり変でしたか？」

母さんにまでそんなふつに思われると少しショックです。

「あ、そういうことじゃないの！別に雛の顔が変とかじゃないから安心して!」

「そうですか？」

「むしろ変じゃないから問題なのよ。」

「え？」

「顔を隠すように言われたとき、他に鏡二は何か言ってなかった？」

「えっと、素顔を見せないようにとか、・・・あ、特に女の人には注意するように言われました。」

その頃は特に大人の女性によく遊んでもらっていて、その人が別の場所で遊ぼうと提案して移動しようとするとう父さんが大家さんが駆けつけてきて女の人から引き離されました。

「雛・・・私からも言っておくけど、素顔を人に見せたら駄目よ。特に、女の子には絶対に見せないこと。いいわね？」

「はい？別に構いませんけど・・・？」

凄く真剣な様子で僕に言いつける母さんに疑問を覚えつつも、今までもそうだったので特に深く考えもせずに頷きました。

「あ・・・。そういえば、母さん、離婚したって本当ですか？」

「ええ。今まで支えてくれたあの人には悪いけど、私には鏡二と雛はかけがえのない大切なものの。あの人との結婚生活も決して不幸ではなかったけれども何かが満たされなかったの。けどね、あなた達のことを想うとそこにはいなくても心が満たされた。こうして会ってみるとそれがなおさら強く感じたわ。・・・私の幸せには雛と、鏡二が必要だって。」

「母さん・・・。」

母さんにそう言ってもらえるだけで嬉しさが込み上げてきます。

「というわけで、今日からここに住むから。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はい？」

笑顔で言われた言葉に思わず間の抜けた声を出してしまいました。

「す、住むってこんなところですか！？自分で言うのもあれですけどぼろい上に何もありませんよ？」

「ないなら買えばいいし、何より雛と鏡二と住めるなら何処でも私はいいいから。」

この後、長時間に及ぶ説得にも応じず、しかも、女優の演技力を無駄に発揮した母さんの泣き落としの前に屈服したのでした。

第二話 早朝。く失恋？く

母さんと暮らすことが別に嫌なわけじゃないんですよ？むしろ、そこまで僕のことを思ってくれて嬉しいんです。でも、ですね……。

「何か言うことは？」

「親子なんだから別にいいんじゃないかなあ」と。

「親と子供でも最低限守るべき節度というものがあるんじゃないんでしょうか？」

「あ、あははは。……怒ってる？」

「怒られるようなことをした覚えがあるんですか？」

「ゴメンなさい。だから、その感情の籠らない平坦な声は止めてください。」

ああ、そういえば僕ってあの日以来、頭にきてるときは感情が消え失せて無表情、無感動になるんですね。うん、無意識のうちに予想以上に怒ってるらしいです。

で、朝っぱらから息子の布団に忍び込んできた常識の足りない母さんに土下座をしようと問答無用で無言の圧力をかけてしばらくすると多少溜飲が下がってきたのでため息をつくと目を逸らします。

「とりあえず、その目のやり場に困る格好はさっさと止めてください。」

現在の母さんの格好は下着を下だけはいて上はワイシャツ一枚、第二ボタンまで開けているという年頃の青少年には刺激が強すぎる格好です。そんな格好で布団に忍び込むものですから怒ったわけです。さつきまで頭にきていたので何も思いませんでしたが、少し冷静になるととても直視は出来ません。

「あ、やつと男の子らしい反応。」

「カアサン？」

「着替えてきます！」

一言圧力をかけると一目散に部屋から出て行きました。

ちなみにこの家は僕の部屋と今僕がいる部屋しかないので、昨夜は母さんは僕のベッドで寝てもらって、予備の布団を引っ張り出して僕はこの部屋で寝ました。

布団を片付て手早く服を着替えたとき、着替えた母さんが戻ってきました。

「おはようございます。」

「おはよう。って、今気づいたけど、本当に早いわよね？」

母さんの言つとおりまだ朝日も昇っていません。

「これからバイトですから。」

「バイト？」

「はい。新聞配達のバイトです。父さんがいなくなってお金を稼がないといけませんでしたから。」

それでも中学に上がるまでは大家さんの厚意に甘えていたのですが、中学に上がってからはいくつかバイトを掛け持ちしてできる限り大家さんにお金を払って住まわせてもらっています。それでも、ちょっとした条件と破格の安さですが。

「朝食は帰ってきたら作るんでそれまで適当に時間を潰しててください。」

「ううん、待ってる間に私が朝食は作っておいてあげる。」

「え・・・？ああ、そういう発想もありましたね。」

今までの習慣と大家さんの壊滅的、もとい、独創的な料理のおかげで誰かに作ってもらうという選択肢が抜け落ちていました。

「それじゃあ、よろしくお願いします。」

「任せておいて。腕によりをかけて作るから。」

母さんがご飯を用意して待っていてくれている。そう思うだけで嬉しくなっていていつもより足取りが軽くなって出かけました。

~~~~~

自慢じゃありませんが僕は体力と足腰には自信があります。

「はっ、はっ、はっ。」

それというのも町外れにあるあのアパートから毎日のように登校していることと高校に上がってからはいくつ走って新聞配達をしているからです。

自転車を使えばいいじゃないかと思う人もいるかもしれませんが、他の人が使って僕の分までないので仕方ないんです。

「おはよう。」

「おはようございます。」

最初は紅い髪をなびかせながら走る僕に驚く人がたくさんいましたが今では自然と挨拶出来るくらいに慣れたようです。

半分以上配り終えて坂道を登っていくと登りきったところにある洋館の前に人影がありました。

「おはようございます、お兄さん。」

「おはようございます、かぐやちゃん。」

雪のように白い髪を腰まで伸ばし紅い瞳の僕と同じくらいの身長この少女は姫夜<sup>ひめや</sup>かぐやちゃん。

頭をきつちりと下げて礼儀正しく挨拶をしてくれるとてもいい子です。

「はい。どうぞ。」

「ありがとうございます。」

足を止めて新聞を渡すと微笑みながら受け取ってくれます。

「体は大丈夫ですか？」

「はい。ここところは調子がいいんです。」

かぐやちゃんは生れつき体が弱く、特に日の下にいと具合が悪くなるらしくあまり家から出ることがないそうです。

「こうしてお兄さんとお話してるからかもしれませんね。」

「そうじゃないですよ。かぐやちゃんが頑張ったからこうしていられるんです。」

今から三ヶ月ほど前にかぐやちゃんは手術を受けました。手術自体の話は何年も前からあったらしいですけど、失敗すれば命を落とすということと成功率の低さから本人が受けることを拒否していたそうです。

手術は無事に成功して、それからしばらくは病院で療養していて二週間ほど前に帰って来ました。

「それならなおさらお兄さんのおかげですよ。私はお兄さんに手術を受ける勇気をもらったんですから。」

「でも、僕ら手術前に最後に会ったときは喧嘩して、ひどいことを言った覚えがあるんですけど?」

そのときはかぐやちゃんと過去の僕、一番荒れていた頃の自分が重なって怒りが込み上げ、きついことを言ってしまった家に帰って頭が冷えると後悔していました。

でも、何故か次に会った時にお礼を言われて以前と同じように付き合っています。

「何ででしょうね?」

聞いても毎回微笑みながら誤魔化して答えてくれませんが、彼女が元気になってよかったということで自分を納得させています。

「話は変わりますが、お兄さんに一つお知らせがあります。」

「お知らせ、ですか?」

「この度、体の状態が改善されたので学校に通えるようになりました。」

「本当ですか?」

「はい。お兄さんと同じ学校に通うことになりますのでよろしくお願いします。」

「こちらこそよろしく願います。でも、勉強についてこれるんですか？」

「それなら大丈夫です。乙ちゃんおとの勉強を手伝っていたことが多かったのである程度は分かっていましたし手術が終わってから乙の教科書を借りて勉強しましたから。」

乙ちゃんというのはかぐやちゃんの双子の妹です。二卵性らしいのでかぐやちゃんのようなアルビノと病弱な体質は持っていませんが、顔立ちはそっくりです。

乙ちゃんのかぐやちゃんとは対称的に元氣一杯な子で、姉であるかぐやちゃんに対して過保護なお姉ちゃん大好き子です。

でも、頭がちよつと弱い子なので勉強のほうあまり芳しくありません。

「そうですか。何時から学校に来るんですか？」

「今日からです。」

「随分急ですね。」

「お兄さんを驚かせようと思ったんです。あ、先輩とお呼びしたほうがいいですか？」

言い忘れていましたが彼女は一つ年下で高校一年生です。でも、彼女からかもし出される落ち着いた雰囲気はもつと年上に見えさせていないことも無いです。

「いえ、かぐやちゃんの好きなように呼んでください。」

「では、今までどおりお兄さんと呼ばせてもらいます。それはそうと、お兄さん今日は何だか機嫌がよさそうですね？」

「え？そうですか？」

「はい。お兄さんの笑顔がいつもより1・5割り増しで綺麗ですから。」

1・5割り増しって何を基準にしているのでしょうか？それに、僕の顔のほとんどが隠れているのに笑顔の綺麗とかが何で分かるんでしょうか？

「何かあったんですか？」

「ええ、まあ。」

素直に母さんと暮らせるようになったと言ったら、色々聞かれて迂闊なことを口にしてしまいそうです。

母さんは大女優の燈鏡 紅です、ということが知られたら僕はともかく母さんに迷惑がかかってしまうかもしれません。女優にスキヤンダルはその道の障害になってしまいますし、それは僕の望むところではありません。ただでさえ母さんは離婚直後で注目が集まっているんですから僕という息子の存在は格好のネタでしょう。

「ずっと昔から大好きで、思いを伝えることも会うことも出来なかった人と昨日会えたんです。」

というわけで少しばかり話すことにしました。

「え・・・？」

しかし、何故かかぐやちゃんの表情が凍り付いてしまいました。

「どうかしましたか？」

「あ、いえ、な、なんでもありません。」

いつも落ち着いているかぐやちゃんが少し落ち着かない様子で声も震えています。一体どうしたんでしょうか？

「あ、あの、それで、お兄さんはその人にお兄さんのす、好きだって想いを伝えたんですか？」

「はい。」

「あ、相手の方はど、どのようなは、反応をしましたか？」

「とっても喜んでくれました。」

「あ、ああ、相手のか、方は、お、お兄さんのこ、ことをど、どう思っているんですか？」

「絶対に必要な人だって言われました。」

母さんにそこまで言ってもらえたときの嬉しさと少し恥ずかしさが込み上げてきてちよっと照れてしまします。

「つ、つまり、そ、相思、そ、相愛という、ことですか？」

「うーん、そういうことですかね。」

お互いに深い家族愛で思いあっているのですその表現もあながち間違っていないですね？

「そ、そうです、か・・・。」

「あの人にとっては僕は二番目なんでしょうけど、それでも僕はとても嬉しいんです。」

「に、二番目・・・！そ、その人にはお兄さんより好きな人がいるんですか！？」

「は、はい？そうですけど、僕はそれでもいいですから不満はありませんよ？」

母さんの一番は父さんですし、僕もそうであって欲しいですから何も文句はありません。でも、何でかぐやちゃんはこんなにも動転しているのでしょうか？

「うつ・・・。」

「え？か、かぐやちゃん？ど、どうしたんですか？」

目の端に涙が溜まってきたかぐやちゃんを見て僕は慌てました。

「一番にお兄さんを愛していない人に負けるなんて・・・。」

「ま、負ける？何のことですか？」

「・・・ごめんなさい。気分が優れないんでもう中に戻ります。」

「え、あ、ちよつと・・・。」

「さようなら・・・。お兄さん。」

かぐやちゃんは踵を返すと走って家の中に入っていました。今日は調子がいいんじゃないかなかったですか？

何だかよく分かりませんでしたが何かあったみたいなので今度あったときには相談に乗ろうと思います。

おまけ

母さんの手料理は大家さんと同レベルな壊滅的、もとい、独創的な料理でした。・・・ぐふつ。

第二話 早朝。く失恋?く（後書き）

手料理のシーンを書こうかとも思いましたが、中々そのシーンがうまく思い描けなかつたので省略となりました。ですが、いずれ壊滅的料理を前に奮闘する雛を書きたいと思っています。

第三話 辱。おまけで朝。 〵誤解拡大〵（前書き）

あれ？これコメディじゃなくね？と、思い始めた。

### 第三話 辱。おまけで朝。 誤解拡大

今日も早朝に目を覚ましてまずは自宅の道場で素振り、父上と打ち合いをして汗を流して朝食をして身支度を整え登校、そして今度は学校の剣道場で朝練に参加して、練習が終わると今度は念入りに身嗜みを整える。

「そういえばあ最近、皐月ちゃんって女の子らしくなったねえ。」

「突然何だ？」

隣で着替えていた彩華さいか 睡蓮すいれんが私の顔をジッと見ながらそんなことを言ってきた。

薄紫色の髪を肩口まで伸ばし、前髪で左眼だけ隠している垂れ眼のおっとりした感じの女性で、私とは違い豊満な胸を持ち合わせている。

こんな雰囲気似合わず剣道の腕は部内で私に次ぐ二番目の実力者で県大会の上位に常に食い込んでいる。私とは同学年で練習でもよく相手をしていて、強者同士気も合うので仲はかなりいい。

「入学したての頃も身嗜みには気を使ってたけどお、それは自分を律するみたいな側面が強かったんだよあ。でもあ、今は自分の見た目を気にしてるって感じなんだよねえ。」

「私だって女だ。それくらいは気にする。」

「私はあ誰かを意識してるんじゃないかとお、思うんだけどお？」

「そ、そんなことはない。」

睡蓮に言われて直ぐに雛の顔が浮かんで心臓が高鳴るのを感じた。

「あれえ？でもお、ちよつとお顔が赤いですよお？」

「き、気のせいじゃないか？」

このくらいで心を乱すとは私もまだまだ精進が足りない。

「最近たまに、皐月ちゃんが恋する乙女の顔をしてるのに、気づいてるう？」

「こ、ここ、恋！？な、ななな、何のことだ！？」

「うわあ、真っ赤だあ。」

お、落ち着け！落ち着け！ここで取り乱したらそうだと言っているようなものだぞ！

「分かりやすくてえ、可愛いよお。」

「な、何をい、言ってるんだ？わ、私がこ、ここ、恋なんてして、してるわけないだろ？」

「うーんとお、説得力皆無だよお？」

「な、何を根拠にそんなことを。」

「お相手はだあゝれえ？」

「だ、だからこゝ、恋などしていない。」

「みんなも知りたいよねえ？」

睡蓮に言われて周りを見ると、他の部員が私たちの話に耳を傾けていたらしく興味津々にこちらを見ている。

「こゝ、暦が恋……。は、ははは。夢だ。これはきつと夢なんだ。」  
「相手は誰？」「闇討ちする？」「照れる暦さんもいいわね、じゅる。」「殺殺殺殺……。」「私のさつきんがああああ。」「暦さんを誑かす男に鉄槌を下さないとね、ふふふふふふ。」

その向こう側に危ない集団が見えたが幻覚だと自分に言い聞かせることにした。

「……。黙秘権を行使させてもらっつ。」

「ええゝ、何でえゝ？」

いや、あいつらの前で名前を出すのは危険すぎるだろ？

それから睡蓮の追求を何とかかわしきつたが、一部の連中の視線に危険なものを感じて制裁を加えておいた。

~~~~~

最近はたまに昼を雛達と過ごすこともあり、今日も雛達と昼食を一緒にしようと思いい彼らの教室に行った。

「・・・愚弟、何をした？正直に言えば今なら八分殺しで許してやるぞ？」

「何で俺！？ってか、今の時点で八分ならその後はどうなんだよ！？」

「九分九厘殺しだが？」

「ほとんど死んでる！？つか生きてねえよ！」

行ってみれば雛が机に覆いかぶさるようにつぶせの状態で動かず、時折痙攣したりうめき声を発するなどの誰から見ても分かるとおり調子が悪いのは一目瞭然であり、一番疑わしい愚弟を問い詰めたのだが白を切るつもりらしい。

「まあ、待て。暦姉。暦の存在自体が疑わしいのは分かるが、今日に限っては残念ながら、無実だ。」

「俺の存在否定すんじゃないねえ！」

八夜が言うなら事実なのだろうと思い、愚弟に対する疑いを晴らした。

「では、一体どうしたんだ？」

「どうしたと言われても、雛は朝に登校してきて席に着いたら力尽

きたかのように今の状態になったからな。事情を聞く暇もなかった。

「起こそうとした先公も気味悪がって起こさなかったしな。」

確かに雛が長く紅い髪と白い肌のせいであたでさえそういう雰囲気があるのに痙攣したりうめき声を上げたりするとホラー映画並みの迫力がある。

「心当たりはないのか？」

「恐らく、朝食が原因だとは思いが……。」

「朝食？」

「大家さんの飯はかなりヤバイんだよ。前にも同じような状態になったときは間違って大家さんの作った飯を食べたときだったしよ。」

「しかし、雛もそれは重々承知していて警戒しているはずなんだが。」

「まあ、たまにはそういうこともあるんじゃないかねえの？」

八夜が未だに納得いかなそうにしているが、愚弟がそう締めくくった。

そのときに突然、荒々しく教室の扉が開かれて私たちがそちらに視線を向けた。

「紅チビイイイーーーーー!!!」

「げぶらっ!？」

それとほぼ同時に私の横を誰かが通り過ぎて、雛に跳び蹴りを食らわせた。

いきなり飛び込んできたのは女で、茶髪をショートカットにしている。吊り目の勝気そうな顔立ちで制服についているリボンが赤であることから一年生らしい。ちなみに、私たち二年が緑、三年が青になっている。

女は椅子から転げ落ちて床に力なく転がる雛に馬乗りになって胸倉を掴みあげた。

「あんた、姉さんに何をしたのよ!! さっさと吐け! 謝れ! 償え!」

「あうううううう。」

激しく雛の頭を揺さぶる女はで怒っているようで雛を詰問しているが、あんなに揺さぶっては答えられるわけがない。

「・・・何だか知らんが、とりあえずそんなに揺さぶっては答えられるものも答えられないと思うが?」

八夜がそう言うと、女は揺さぶるのを止めて顔を近づけて睨みだした。

「さあ、さっさと吐きなさい!」

「・・・は、吐いちゃいます。」

「姉さんに何したの！」

「うぶっ……。」

青い顔で口を押さえる雛にやっと女が気づいたらしい。

「って、何吐こうとしてんのよ!!」

「げふう!ごくつ。」

勢いよく離れたせいで雛が床に叩きつけられ、込み上げてきたものを飲み込んでしまったようだ。

「お、乙ちゃん、ひどいです。」

「あんたのことなんてどうでもいいのよ。さあ、姉さんに何をしたか言いなさい。そして謝って償え。あと乙ちゃんって言っな。」

乙というらしい女は高圧的に雛に言い放った。

「……事情がいまいち飲み込めないんだが？」

「あんたたちには関係ないことだから説明する必要もないでしょ。」

女はちらりと視線を向けただけで八夜を適当にあしらった。

「そんなこと言わずにさあ。俺も君みたいな可愛い子のためなら協力を惜しまないから事情を聞かせてくれない？」

愚弟が軽薄な笑みを浮かべて媚びるような声を出して女に話しかけると女は愚弟を一瞥する。

「うざい。邪魔。消えて。あんたみたいな奴は生理的に受け付けないから。存在自体が嫌。息もしないで。今すぐ塵も残さずに消滅して。っていうか、消滅しろ。」

完全な拒絶に流石の愚弟も一瞬硬直するが、すぐに再起動して懲りずに話しかけた。

「あ「喋るな。失せろ。生きてるだけで気持ち悪い。有害物質の癖に話そうだなんて頭のほうは腐ってるの？今すぐ全人類、全生命に生きてることに對して謝罪したら？まあ、謝られたところで謝られた側はあんたみたいなのに謝られても気分を害して迷惑でしかないけど。」

言葉を遮られた上に軽蔑に満ちた視線で見られ罵詈雑言を浴びせられ流石の愚弟もショックのようで教室の隅で縮こまって影を背負いながらうじうじし始めた。気持ち悪い。

「相変わらずの毒舌っぷりですね。」

「事実を言っただけよ。」

相変わらず雛の上に馬乗りのまま女は不機嫌そうにそう答えた。

「雛の知り合いか？」

「あ、皆は会ったことありませんでしたね。この子は姫夜 乙ちゃんといって一年生の子です。」

「どうも。」

姫夜は渋々といった感じで挨拶をした。

「で、こっちは彼が八夜 九陽君で、彼女が暦 皐月さん、あそこにいる気持ち悪いのが暦 葉月君です。皐月さんと葉月君は乙ちゃんと同じ双子ですよ。」

「紅チビの交友関係なんてどうでもいいのよ。そんなことより姉さんに何をしたの!？」

「何をしたって、かぐやちゃんに何かあつたんですか？」

「とばけんじゃないわよ! 私が今朝、起きた時点で姉さんの様子がおかしかったんだからあんたしか犯人はいないのよ!」

再び、胸倉を掴みあげて雛の顔を間近で覗き込む。

「確かに今朝、話したときは元気だったのに急に気分が悪くなったとは言ってましたけど僕が何かした覚えはないんですけど?」

「姉さんの様子があそこまで変化するなんてあんたしか原因は考えられないのよ! 腹が立つけど今の姉さんに一番影響力を持ってるのはあんたなんだから!」

「そう言われましても僕に心当たりはないんですけど。」

「落ち着け、姫夜妹。」

雛が困っていると八夜が割って入った。

「何よ？」

「話を整理すると、姫夜姉の様子に姫夜妹が起きたときからおかしく、それより早く会っていたはずの姫夜姉とかなり親しい雛が何かをした、と思つてここに殴りこんできた。ということか？」

「そうよ。」

「で、雛は確かに早朝に姫夜姉と会っていたが何かをした覚えはない。」

「はい。」

姫夜の姉と雛がかなり親しいと聞くと胸のうちに何かもやもやしたものが湧いてくる。

「雛は姫夜姉と何を話していたんだ？」

「いつも通りただの世間話ですよ。今日からかぐやちゃんが学校に通うことと昨日のことを話したくらいですから。」

いつも、ということはかなり頻繁に会っているのか？かなり親しい女と？

「昨日のこと、というと大家さんの呼び出しか？」

「はい。でも、実際は用があつたのは大家さんじゃなかったんですけど。」

雛が凄く嬉しそうな笑顔を浮かべていて、私はその笑顔に見惚れてしまった。

「・・・何があった？」

「・・・ずっと、想いつづけてた人と会えたんです。」

その言葉に笑顔によってもたらされた温かい気持ちが一気に吹き飛んだ。

「同じ内容のことを姫夜姉にも言ったか？」

「はい。」

「そのときに何か言っていなかったか？」

「そういえば、その想いを伝えたのか？とか、その人はどういう反応をしたのか？とか、何て言ったのか？とか、相思相愛なのか？とか、変なことを聞かれてその辺から様子がおかしかったような・・・。」

「・・・相思相愛というところでは何て答えた？」

「そうですね、答えましたが？」

八夜はため息をついていたが、私はそれどころじゃなかった。

雛が誰かと相思相愛？ずっと想い続けてきた人と？

自分の中で何かがすっぽりと欠けてしまったような喪失感に襲われ、茫然自失になってしまう。

「・・・まさか、今朝から様子がおかしかったのもその相手が原因か？」

「よく分かりましたね。朝食を作ってもらったんですけどそれが大家さん並に壊滅的で、せつかくあの人が作ってくれたものを残すのも嫌だったんで無理して食べたんです。」

朝食を作ってもらった・・・？ということは、朝から雛の家にいた、ということ？それほど親密な関係・・・？

「って、お、乙ちゃん、どうしたんですか？」

「何でもないわよ！！」

「げふつ。」

雛を床に叩きつけると姫夜は足早に私の横を通っていく。そのとき、彼女の目の端に涙のようなものが見えた。

「あんたなんかその女にいいように弄ばれてピーピー泣いてればいいのよ！！馬鹿！！最低！！地獄に落ちろ！！」

雛に背を向けたままそう怒鳴ると走って教室を出て行ってしまった。

「・・・えつと、僕、何かしました？」

「彼女もその姉も不憫だな・・・。暦姉、お前は大丈夫か？」

雛に、恋人、が・・・？

「暦姉？」

「臯月さん？」

「・・・すまない。今日は失礼する。」

雛の顔をまともに見ることも出来ずに私はその場から逃げ出した。

その後に、顔色が優れないように見えたらしい私に何人もの人が心配してくれたが正直、よく覚えていない。午後の授業も上の空のままだった・・・。

これからどのような顔をして雛に会えばいいのか。雛とその人のことを応援できるか。雛と今後、今までと同じように付き合えるか。私の想いをどうすればいいのか。

色んな考えがごちゃまぜになり、泣きたくなった・・・。

第三話

辱。おまけで朝。

ゝ誤解拡大ゝ（後書き）

コメディが書けない。コメディを書きたいけどどう書けばいいのかわからなくて、別な感じになってしまいました。このまま書いてもコメディと称していいのか悩みます。

第四話 喫茶『紅葉へもみじ』

何だかよく分からないけど、僕のせいで皆の様子がおかしいのは確かだと思います。

朝からかぐやちゃん、昼に乙ちゃんと皐月さん。凄く落ち込んでいたけど原因が分からない僕には励ましようが無いです。

九陽君に相談をしても

「お前が自分で気付かなければ意味のないことだ。」

と言われ、有害指定物質、もとい葉月君に聞いてみれば

「俺が敵に塩を送るまねをするてばあー!!」

何かむかついたのでアップパーを決めておきました。

というわけで、午後の授業中は机に突っ伏して朝の母さんの兵器、もとい料理のダメージに耐えながら悶々と考えていたのですが何も思い当たらずに放課後になってしまいました。

「・・・雛君、君、今日休んでいいよ。」

「すみません・・・。」

バイト先の喫茶店『紅葉^{もみじ}』に来たのですが、茶髪で常にダルそうな目をしている駄目な人間の空気が漂う店長が僕の顔を見るとすぐにそんなことを言われました。

未だに顔が若干青ざめていて足もとふらつく僕を見ればそう言われても仕方のないことです。

とりあえず、客として席に座ってまたテーブルに突っ伏してしました。

「お客様。ご注文は？」

「ふい？あ、冬琉^{ふゆ}ちゃん。こんにちは。」

顔をあげると店長の趣味であるメイド服に身を包んだバイト仲間の紅葉^{くれは} 冬琉ちゃんが無愛想な顔で立っていました。

一つ年下の高校一年生で水色の髪をボブカットにして縁なしの眼鏡の向こうに冷たい視線をもった眼があり全体的に冷たい感じの子です。でも実際は、少し厳しいくらいでいい人なのです。

店長曰く、最近は胸が小さいことが悩みだとか。それを聞いていた冬琉ちゃんに泣くまで店長がぼこぼこにされていたのも記憶に新しいです。

「ご注文は？」

「あ、水だ・・・、いえ、じゃあ、紅茶で。」

「かしこまりました。」

水だけで結構です、と言おうとしたら睨まれたのでその圧力に屈して紅茶を注文しました。

整った顔立ちの子が冷たい表情で睨んでくると迫力があるんです・・。

「今日は一段と冬琉は不機嫌だね。」

「心なしかそう感じるぐらいじゃないですか。」

何時の間にか対面に座っていた店長に驚くこともなく答えます。

普段から感情の変化が分かりにくい冬琉ちゃんですが、バイトを始めて一緒に仕事をするようになると段々と彼女の感情の変化を感じ取れるようになりました。

「いやいや、さっきまでは上機嫌だったのだよ、これが。それがついさっきあなった理由、わかるかい？」

「さあ？僕にはさっぱり。」

「それはだね。冬琉ぐあつ！！」

鈍い音とともに店長がテーブルに倒れました。

「店長。仕事中はちゃんと働いてください。」

その後ろに何故か赤い液体の付着した灰皿を持った冬琉ちゃんがいきました。・・・何がっているか僕にはワカリマセンヨ？

決して追及して店長の二の舞いになることを怖れたわけではありません。

「くっ……。あの無感動だった冬琉をこんな凶行に走らせるとは流石は雛君だ。」

「テンチヨウ？」

「すみませんでしたっ!!」

冬琉ちゃんが灰皿を再び、持ち上げると店長は驚くほどの速さで土下座を敢行する。というか、店長、頭の怪我は大丈夫なんですか？

ちなみに、店長の名前は紅葉 夏春さんかしゅんといい、名前から分かるとおり冬琉ちゃんの父親ですが威厳はこの通り微塵も感じられません。

「あ、水いぶぎゃあ!!」

「。。。。」

「ぶへっ!ばふっ!ばきっ!ぎよえ!ぶへらっ!!ごふっ!!!がはっ!!ぎゃあああ!!」

頭を上げたときにスカートの中を覗いてしまったらしい店長に無言&無表情のまま冬琉ちゃんが何度も灰皿を振り下ろしました。

すぐそばで猟奇的殺人事件の犯行現場のような光景が繰り広げられているにも関わらず、いつものことなので従業員を含む店にいる全員が何事もなかったかのように平然としています。

「ぐっ。。。。わ、私を倒したところで、第二、第三の私が必ずや現れるぞ。」

「そう……。じゃ、ここで殺しても問題ないわね。」

店長がふざけると冬琉ちゃんはマジな雰囲気を感じられる冷たい声を出して店長を見下ろしながら灰皿を振り上げました。

「戦略的撤退っ！！」

本気で命の危機を感じたらしい店長は床をゴキブリのように這いながら逃走を始めました。気持ち悪い上に店長が通った後に血痕が点々と残っていていい迷惑です。

「ふっ！」

「ぐはっ！！」

冬琉ちゃんが灰皿を投げると店長の後頭部にクリーンヒットして悲鳴をあげ痙攣をした後、動かなかった店長の亡骸？をすぐに他の店員たちが慣れた手つきで片付けて店の奥に放り込みました。

店員の誰にも敬われず粗雑に扱われる店長に一応、黙祷を送りました。

「もう、冬琉ちゃん、あまりはしゃいだら駄目じゃない。」

「すみません。チーフ。」

そうしていると栗色のウェーブをかけたロングヘアで細目のおっとりした女性がお盆とモップを持ってやってきました。

この人は冬琉ちゃんの母親で店長の奥さんである紅葉 秋穂さんあきほでこの店のチーフであり、実質上の最高権力者です。

「はい。冬琉ちゃんはお掃除をしてね。で、こっちは雛君が注文した紅茶よ。」

「はい……。」

「ありがとうございます。」

冬琉ちゃんはモップを受け取り、黙々と掃除を始めて僕は紅茶をもらって口をつけました。

「はふつ。相変わらずここの紅茶は絶品です。」

「あら？紅茶だけなの？」

「いえいえ、ここのメニュー全部ですよ。」

実際、本当にここで販売されている品々は本当においしくてここに通う常連さんのほとんどは味にうるさい人達です。かといって、この店に堅苦しい空気はなく先程のような惨状が常に温かい目で見てもらえるくらいに和む空気がかもし出されていてこの街の隠れた名店として一部の人には知られています。

「そうだ……。秋穂さんに聞きたいことがあるんですけど。」

「秋穂さん、だなんて他人行儀な呼び方じゃなくてお母さんって呼んでもいいのよ？」

「いえ、僕の母さんは一人だけですから謹んで遠慮します。」

何故か僕にお母さん、と呼ばれたがっている秋穂さんは僕と顔を合
わせるといつも同じようなことを言っていて、たまに微妙に発音が
違うみたいなのもあるのですが気のせいだと思っています。

「そう。家はいつでも歓迎するのに、残念……。で、聞きたいこ
とって何？」

「さっきまで冬琉ちゃんがご機嫌だったらしいですけど何かあった
んですか？」

さつき店長に聞きそびれたことが気になって秋穂さんに尋ねてみま
した。

この店でそんな馬鹿をする人はいないと思いますが、冬琉ちゃんに
何かイタズラをした人がいるなら撲さ、ゲフンゲフン、お仕置きを
しておこうと思いきや聞きました。

冬琉ちゃんは冷たい空気の子ですが綺麗な容姿をしているのは
紛れもない事実なのでお客さんの間でも人気があります。

以前にたまたまこの店にきた態度の悪いお客さんが冬琉ちゃんに
ちよっかいをふっかけて、店員一同で制裁を加えたりもしました。
そのときは何故か警察沙汰になりお客さんが全面的に悪いというこ
とになったうえ、連行されるときにお客さんはお巡りさんに震えて
泣きながら助けてくれと訴えていました。そのときに秋穂さんが怪
しい笑みを浮かべていたのが印象的で僕はこの人には絶対に逆らわ
ないようにしようと心に誓ったものです。

「ん〜」。教えてほしい？」

唇に人差し指を当てて少し考える仕草をした秋穂さんはいたずらっぱい笑みを浮かべて僕に聞き返してきました。

「まあ、出来れば……。」

「だって、冬琉ちゃん？」

秋穂さんが呼びかけると冬琉ちゃんは一旦、手を止めて顔だけこちらに向き直りました。

「そんな事実がない以上答えられません。」

そう言つてすぐに掃除を再開しました。

「ふん……。あらあら？冬琉ちゃん、そこ、汚れてないよ？」

にやにやした秋穂さんが言う通り、何故か冬琉ちゃんは店長の血痕とは無関係のところにモップをかけていました。

「……。」

指摘された冬琉ちゃんは一度、ピタリと動きを止めると何事もなかったかのように血痕のほうに行つて掃除を始めました。

「あの、それで理由は？」

「じゃあ、ヒント1、冬琉ちゃんがご機嫌になるのは今日に限ったことはありません。」

「キャッ！」

冬琉ちゃんが滅多に出さない女の子らしい悲鳴をあげて何故か何も
ないところで転びました。

「あ、」

「気にしないの。で、分かった？」

「い、いえ。」

「ヒント2、冬琉ちゃんのシフトはよく雛君と重なっています。」

「あうっ！」

立ち上がるために冬琉ちゃんが近くのテーブルに手をつこうとして、
手をつき損なって今度は顔から地面に転んでいました。

「ふ、冬琉ちゃん？」

どうしたのでしょうか？いつもはしっかりものの冬琉ちゃんがさっき
からドジっ娘になっています。

「分かったかな？」

「え、いや、その、そんなことより冬琉ちゃんの様子が……。」

「いいの、いいの。で、分かった？」

「い、いえ、分かりません。」

「じゃあ、ヒント3、その原因にはある人が関係あります。」

「チーフ、話してばかりいないで仕事をしひえっ！ツ~~~~」

床にお尻をついたまま秋穂さんに文句を言おうとした冬琉ちゃんが今度は舌を思いつきり噛んだようで口を押さえて痛みにもだえています。

「ふ、冬琉ちゃん、大丈夫ですか？」

「ん~~~~。流石に可哀想かな。これ以上言っちゃたら答えを言ってる様なものだし。」

「ツ~~~~。」

冬琉ちゃんが立ち上がりながら秋穂さんを睨んで無言の抗議をしています。

らしくない冬琉ちゃんとニコニコとその視線を受け流す秋穂さんの二人の間に漂う微妙な空気を感じて戸惑っていると、来店を告げるベルがなりました。

「ほ、ほら。二人ともお客さんですよ。」

とにかく、この状態を脱しようと二人に他のことに注意を向けてもらおうと僕が話しかけました。

「そうね。いらっしやいませ~~~~！って、雛君のお客さんじゃない

い。」

「え？」

秋穂さんに言われて、入り口の方を向くとそこにはいつも通り黒い格好の大家さんと髪型をサイドポニーにして眼鏡をかけた母さんがいました。

大家さんはこの店の常連さんの一人でいつも僕の仕事ぶりを見に来るので秋穂さん達とも顔見知りです。

母さんたちも僕に気づいてこっちにやってくるのですが・・・、何故でしょう？何かややこしいことになりそうな気がしてなりません。しかも、僕関連で・・・。

出来ればこの予感が当たらないように祈りました・・・。

第四話 喫茶『紅葉へもみじ』（後書き）

本当はこのまま琴音達と秋穂達のからみを書くと思ったのですが、そうすると長くなりすぎるので無理矢理ですがここで切らせてもらいました。

書いていてキャラがどんどん増殖していきますが作者自身、あとどれくらい出すのかまだ決め切れていません。出来る限りキャラが被らないようにしたいですが作者の貧しい想像力では被ってしまうこともありえるので、その点はどうかお見逃し下さい。

とりあえず、次は今回出てきたキャラでのからみを書きますので誤解を解くのはもう少し先になります。

どんな些細なことでもいいのでご意見・ご感想のほうを送っていただけると作者の励みになりますのでどんどん送ってください。

第五話 母親（前書き）

前半はシリアス？

今回は後書きにアンケートがあります。

第五話 母親

今回も引き続き、僕視点です。

・・・って、あれ？僕、何を言ってるんでしょう？

「雛？」

「あ、いえ、何でもありません。」

突如、思い浮かんだ変な電波に首を傾げていると隣に座る母さんが不思議そうに話しかけてきました。

現在、右隣に母さん、左隣に大家さん、対面に秋穂さんと冬琉ちゃんが座っています。

「お仕事はいいんですか？」

「いいの、いいの。今は人が少ないしあの人に押し付けてきたから。」

頭に包帯を巻いた店長が右往左往して一生懸命仕事をこなしているのが見えました。あ、他のバイトの子にこき使われてる・・・。

「で、雛君、こちらの綺麗な人は？」

母さんのことをどう紹介すればいいでしょうか？下手に紹介して燈鏡 紅だと知られるとまずいですしその辺うまく誤魔化しながら説明しないと・・・

「初めまして、雛の母親の燈頼 琴音です。いつも家の息子がお世話になってます。」

「雛君のお母さんですか・・・？」

秋穂さんと冬琉ちゃんは僕が母さんと離れて暮らしていることを知っているので驚いているようでした。

「はい。・・・一時は雛を捨てたも同然の暮らしをしていたのですが、また雛と暮らすことになりました。」

あ、一人暮らしをしてる、って言ってただけでそれは言っていなかったのに・・・。

「捨てたも同然・・・？」

秋穂さんと冬琉ちゃんは更に驚いた表情で僕を見ましたが愛想笑いで誤魔化しておきました。

「今更よく堂々と母親だなんて名乗れるわね？」

「・・・。」

「大家さん、そんなひどいことを言わないでください。」

大家さんの言葉に母さんは傷ついたかのように唇をかみしめます。

「雛ちゃん、私はね、琴音を許せないのよ。今まで自分はぬくぬくと幸せな生活を送ってきたくせに何事もなかったかのように顔を出

してきたこの子をね。」

「それは、母さんが知らなかったからじゃないですか。それに母さんは僕達といれなかったことを悔やんでいます。それに僕は、」

「雛、いいの。」

「母さん……。」

「……確かに瓜の言うとおりなんだから。全部、自分のために周りを振り回して辛い思いをさせたのにあなたの母親を名乗るのはずうずうしかったわ。昨日、雛に許してもらって思いあがってたみたい……。」

「違います。母さんは誰が何と言おうと僕のたった一人の大好きな母さんです。誰が否定しても僕は、僕と父さんだけは絶対にそう思っています。なのに、そんなこと言わないでください。僕は誰でもない母さんに僕の母親であってほしいんです。」

落ち込む母さんに僕の真摯な気持ちをぶつけました。

「雛……。」

「……それとも、僕みたいな息子が、それも血の繋がらない息子がいたら、やっぱり迷惑ですか？」

女優、燈鏡 紅にとって僕という存在は足手まといにしかありません。

そのことは昨日母さんが一緒に暮らすと言ってから気になっていて

つい口に出してしまいました。

「そんなことないわ！！私も雛のことが大好きよ！」

僕が不安そうにしているのを見て母さんが力強く否定しました。

「……大好きだから私みたいな女が雛の母親じゃ駄目だと思うの。」

「僕は、他の誰でもない、母さんがいいです。僕を拾って、育てて、愛してくれた母さんが、父さんと僕が愛した母さんじゃなきゃ、嫌です。」

僕は母さんに、母さんと死んだ父さんにかなり依存しています。

一時期は死んだ父さんの愛を忘れ、傍にいない母さんの愛を信じられなくなったときがありました。

そのときの僕は表面上は普通を繕ってその実、何も信じず、何もかも拒絶して、全てに憎悪して……、意味も無く、孤独が癒えるわけでもなく、負の感情が尽きることも無く……、ただただこの世の全てが理不尽に感じて、全ての人が嫉ましくて、全てのことが不条理に思えて……、壊して、砕いて、蹂躪して……、荒れ狂っていました。

その頃の自分のことを思い出すと恥ずかしい限りで、あのときに知り合った九陽君と葉月君、h他数名以外には大家さんも知らない秘密です。

ともかく、母さんに拒絶でもされたら僕は立ち直れなくなると思います。それくらい依存しているんです。

「大家さんもあまり母さんを苛めないで下さい。そんなことを言う大家さんは嫌いです。」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・？どうしたんでしょうか？何故か時間が止まったかのように硬直しているのですが？」

母さんのほうを見ても同じように硬直しています。

「というか、何か店全体が水を打ったかのように静かなんですが・・・・。」

「うーん、この店は雛君のファンも多いからね。」

「店長、どういうことですか？」

唯一、平然としている店長が僕に話しかけてきました。というか、僕なんかにファンなんていたんですか？

「あれが天然だから恐ろしい……。君がそこにいる君のお母さんに弱い声と様子でお願いしてるときの雰囲気に触れれば折れてしまいそうなのに今にも消え入りそうで尊さほど感じるほどあまりに儚げだったから、途中から修羅場の雰囲気を感じ取って聞き耳を立てていた皆が引き込まれて、なおかつ、近くにいたこの四人は魅了されたと言っても過言ではないだろうね。」

「はぁ・・・・・・・・大袈裟だと思いますが、じゃあ店長は何で大丈夫なんですか？」

「私は秋穂一筋だからさ。あ、ときによっては冬琉も可だね。」

「雛!!」

いきなり母さんに抱きしめられました。

「本当に、本当に私なんかでいいの？」

「何度も言うようですが僕は母さんがいいんです。」

「っ!!」

「もぶっ。」

感極まった母さんに顔を思いっきりその豊かな胸に埋められました。

「頑張るから……私、雛に相応しい母親になれるように頑張るわ……。」

「もふ、ふほ、ほおふあ。」

「でも、まだ私が自分を許せないから母親見習いつてことでいい？」

「ぶはっ。……まあ、母さんがそう言うなら。でも、僕は何時だって母さんのことは母さんだっと思ってますからね。」

力が緩まったので顔を上げると母さんの提案を受け入れました。

「瓜……、私はあなたに認めてもらうまでは雛の母親見習いのま

「ま頑張るわ。いつかあなたに私を雛の母親だつて認めてもらうから。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・それなら、あなたは永遠に雛ちゃんの母親には慣れないわ。何故なら、」

無理矢理母さんの腕から放されて、今度は大家さんの胸に埋まりました。

「雛ちゃんは私の息子になるからよっ!!」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・へ？

「前々からずっと可愛くて健気な子とは思ってたけどここまで健気ない子だったなんてっ！ああもうつ！どうしてそんなに可愛いのか？ずつと我慢してたのにそんな姿見せられたら我慢できないじゃない！！保護欲をかきたてられて堪らないわ!!」

「もぶっ！ふがっ！ふ~~~~!!」

何かを言おうとしても胸に顔を押し付けられているせいで何も言えません。

「ちょ、ちょっと瓜！何言ってるの！？雛は私の子よ!」

「さっき自分で見習いつて認めたじゃない！母親でもない人が口を挟まないで!」

「見習いでも母親なのには変わらないわ！第一どうやってあなたと無関係な雛を息子にするつもりよ!」

「それを言ったらあなただって雛ちゃんに母親って認められてるだけで戸籍上は関係ないじゃない！それにっ！！」

そう言つて瓜さんがテーブルに何かを叩きつけました。

「これが何だか分かる・・・？」

「これは・・・、雛の戸籍の写し？」

何でそんなものを持ち歩いてるんですか？

「そう・・・。父親のところに宝良君の名前があるけれど、母親のところは空欄・・・。宝良君が亡くなつた後は私が後見人になつてゐるわ。・・・つまり、戸籍上は雛ちゃんは両親がいない孤児。今まではあなたと雛ちゃんに勝手に黙つてやるのは悪いと思つてたからやらなかつたけど、雛ちゃんの母親の座は養子縁組をすれば手に入るのよっ！！」

「なっ！？ちよつとそんなこと許さないわよっ！！」

「あなたに許してもらわなくても勝手にやらせてもらうわっ！」

「まあまあ、二人とも落ち着いてください。」

興奮する二人を秋穂さんが宥めているようです。

「ここは間をとつて家で雛君を養子縁組するということ。」

「いいわけないでしょう（じゃない）！！」「」

いや・・・、秋穂さんなら参加してきそうな気がしたんですけどね・・・。常日頃からそういうことを言っていましたから。

「それにしても、雛君、思った以上に複雑な事情を抱えてたのね。」

「まっっ、もっっ、うっ。」

未だに大家さんの胸の中なので話すことが出来ません。というか、
い、息が・・・。

「うっ！むっ！」

「いい加減に雛を放して！」

「ぷはっ！！」

母さんに引っ張られてようやく息をすることが出来ましたが、まだ
体の半分は大家さんに引っ張られたままです。そしてもう片方を母
さんに引っ張られているため地味に痛かったりします。

「雛君、家に来る気はないの？」

「さっきも言いましたが、僕の母さんは母さんだけなので断りし
ます。」

「そう・・・。気が向いたら何時でも家は歓迎するわよ。」

あれ？思ったよりあっさり引きました。

「・・・何を企んでるのかしら？あなたも雛ちゃんひなちゃんの母親の座を虎視眈々と狙ってたはず・・・。顔を合わせるたび誘いをしてあわよくばそのまま母親の座に着こうと、断られても毎回言うことで雛ちゃんに自分たちが受け入れてくれる存在であると刷り込んでたじゃない。」

あの誘いにそんな深い企みがあったんですか？

大家さんの一言で母さんまで秋穂さんのことを敵を見るような目で見えています。

「確かに雛君の母親の座は今も狙ってるし、さっきの雛君の姿を見てより一層家に迎え入れなくなっただわ・・・けど、私にはあつてあなた達にはないものがあるのよ・・・そう、私には冬琉ちゃんという娘がいる。」

秋穂さんが不敵に笑いました。

「まさかつ！」

「っ！そういうことなのね！」

どういうことでしょう？

「冬琉と雛君が結婚すれば、自動的に私は雛君のお義母かあさんという立場が手に入るのよ。あなた達のどちらかが雛君の戸籍上の母親になったとしてもまだ私の入る余地がある、ということ。」

「そんな卑怯な手を使うなんて・・・！」

「卑怯も何もこの勝負は雛君の『おかあさん』になれるかどうか。その間に嫁を挟む、挟まないの制限はないのよ。」

何故か悔しそうにしている大家さんに余裕をもった様子で言っていますが、何時からそんな勝負になったのでしょうか？

「でも、それって冬琉ちゃんの意志を無視してないですか？」

「ふっ……。」

僕が最もな意見を言うつと鼻で笑われました。

「冬琉ちゃんも黙ってないで何か……？」

冬琉ちゃんを見ると焦点のあっていない目で僕のほうをボーっと見ていました。

「冬琉ちゃん？」

「あらあら、冬琉ちゃん、帰ってきなさい。」

「はうっ。」

秋穂さんが鋭い手刀を首筋に叩き込むと冬琉ちゃんの目の焦点が合ってきました。……何か古いテレビの映りを直すときみたいだと思っただのは秘密です。

「一体、何が……？」

「ほら、冬琉ちゃん、雛君が聞きたいことがあるって。」

冬琉ちゃんが状況が掴めず困惑しているようなので簡単に聞くことにしました。

「何か？」

「冬琉ちゃん、僕のこと好きですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
ごめんなさい。もう一度、言ってもらえる？まだボーっとしてるみたい。」

「だから、僕のこと好きですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・好きかどうか？私が？
あなたを？・・・それは、異性として？」

「はい。具体的に言えば、結婚するぐらいに。」

「・・・・・・・・・・。」

いきなりこんなことを聞かれて混乱しているようです。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ツー!!」

「うわっ!!」

どこからともなく灰皿を取り出すと僕の顔目がけて投げてきました。
母さんと大家さんに掴まれてうまく動かない体を首だけ動かして何

とか回避しました。店長のようなゴキブリと同等の生命力を持たない僕があんなのを受けたら大怪我をさせていただきます。

しかし、冬琉ちゃんはそんな身動きの取れない僕に対して身を乗り出して鋭い右フックを繰り出して、見事に僕の顎を捕らえました。

脳を揺さぶられて意識が落ちていく中、最後に見た普段は感情を表さない冬琉ちゃんは顔を真っ赤にして怒って僕の胸倉を掴んでいました。

そんなに僕は嫌われてるんでしょうか・・・？

おまけ

「な、何を寝ぼけたことを言っている！？わ、私があなただのことがす、好きかどうかだ！？いきなりそんなことを聞くとは気でも狂ったか！？す、好きか嫌いかで言えばそ、その、まあ、嫌いではないが・・・。そんなことをいきなり言われるとこ、心の準備が、その、それに、いきなりけ、け、結婚など、そ、そういうのは、もっとお互いのことを知ってからだな、お互いの両親に了解をとって・・・、はっ！両方の両親がここにいる！？ま、まさか、いきなり母親と名乗る女性が現れたのはそういうことなのか！？い、いいい、いや、だが、しかし、」

「まあ、雛だから予想はしてたけど見事に惚れてるわね、彼女。」

「雛ちゃんの勘違いさせるような言い方も悪いけど、あれは動転しすぎじゃないかしら？雛ちゃんが気絶していることにも気づいてないみたいだし。」

「私も冬琉ちゃんがここまで動転するのは始めて見るわ。狙い通り雛君が勘違いさせたのはいいけどここまでするとは……。」

「……そろそろ冬琉に事情を説明してやったほうがいいんじゃないか？そろそろ妄想が妊娠までいつてるみたいだが？」

「面白そうだからこのまま見てしましょ。あなたも冬琉ちゃんこんな姿をもつと見ていたいでしょ？」

「まあ、確かに。ところで、話は変わるが『雛君の母の座は誰の手に！？』ということでは賭けをやっているのか？」

「私は別にいいけど。」

「私も構わないわ。」

「私も。でも、『誰が雛君を射止めるか？』のほうはどうするの？」

「そつちも並行してやるさ。……冬琉がこんな感情豊かになったのには感謝しているが、彼にはもっと周りをかきまわしてもらえないとな。ま、頑張ってくれ。」

第五話

母親（後書き）

書き上げてあれ？冬琉と琴音＆瓜絡んでなくね、と思いました。

とりあえず、恋愛とは別に雛を巡る争いを書いてみました。しかし、瓜はシヨタの傾向があるのでその方面でも狙っていたりします。さて、アンケートのほうですがこの作品のキーワードを募集したいと思います。作者の貧困な脳に頼るよりもこの作品を呼んでる読者様に聞いたほうがよりこの作品に合うキーワードが出てくるのではないかと思ったのです。この作品に合うと思うキーワードを三つ書いて感想を送ってください。よろしく願います。

次の投稿までに多いもの上位五つを採用したいと思います。ついでにご意見・ご感想などを送ってくれると嬉しいです。

第六話 一年生達（前書き）

私生活が落ち着き久しぶりの更新です。

第六話 一年生達

私には私の命と同じくらい大事な文字通り血を分けた半身である姉さんがいる。

けど、姉さんは生まれつき体がとても弱かった。姉さんの元気を吸い取ったかのように私は病氣知らずだった。

私はそのことで姉さんに負い目を感じていた。姉さんの姿を見るたびに本当に姉さんの健康は私が母さんの胎内で奪ってきてしまったのではないかと想像を働かせてしまうのだ。

そんな私に姉さんはそんなことはないと言いかけて慰めてくれる。病弱ながらも健気に笑うその姿に私の両親は心を痛めていた。・・・けど、半身である私はその笑顔の奥にある負の感情に気づいた、気づいてしまった。

笑顔の奥にその何をするにも不自由な病弱な身を与えた神に対するやり場のない怒りが、恨みが、絶望があつたのだ。

私が気付いたことに気づいた姉さんがその笑顔に慄く私の耳元でそつとこつ囁いた。

「どうしてあなたはそんなに元気なの？」

憎しみも怒りも何もこもっていないが、透明すぎる無機質な声に私は凍りついた。

その声にどれだけの想いが込められていたのか、私には未だに推し量ることが出来ない。生まれてからずっと一緒にいてたった一度だ

け零したその問いかけにその絶望を知らない私がそれを完璧に理解することは出来ないのだろう。

絶望を知らない者に、絶望を理解することは出来ない。

私が出来るとは私の出来る限りで姉さんを護る事だけだった・・・。

あるときから姉さんに近づいた奴がいた。

それが紅チビこと、宝良 雛という男だった。

姉さんが言うには、早朝、まだ日が昇る前に何となく外の空気を吸いに庭に出て行ったときに新聞を届けに来たアイツと出会ったのがきっかけだったらしい。

正直、私には納得がいかなかった。いつもニコニコして何の不満もなく楽しそうにしている奴が姉さんの周りにいてもためにならないと思った。

だけど、予想に反して姉さんは楽しそうに、それこそ余計な不純物を混ぜていない純粹な笑顔を見せることが増えていった。

姉さんにそんな笑顔を与えるのが私じゃないことが悔しくて、アイツにはちよつと敵しめに当たることが多かった。

普段でさえ少し荒々しい性格だと自分でも自覚があるので敵しめといえは大抵、すぐに手や足が出て喋れば攻撃的な言葉しか出てこない。

そんな私のことも文句をいったりしながらも何だかんだで相手をしてくれるそういう寛容さが姉さんに笑顔を与えるために必要だったのだろうかと思ったりした時期もあった。・・・悔しいから本人にはそういうことは決して言わないけど。

けど、それが思い違いだと気づいたのは両親が紅チビに姉さんがずっと拒んでいた手術の説得を頼んだときだった。

不満はあったけど二人きりにして説得をさせていると姉さんの怒鳴り声が聞こえてきた。

姉さんが怒ったところなんて見たことがない私と両親はそれに驚きながらも説得が失敗したと思い、私が姉さんの部屋に行く途中で階段から降りてくるアイツとすれ違った。

私はアイツの腕を取って引き止めた。姉さんを怒らしたことに對することや説得に失敗したことに対して何か言ってやろうと思ったのだ。

「すいませんが、今日は帰らせてもらいます。」

私はそう言って私の手を押しのけ帰るアイツを止めることが出来なかった。

その無機質で透明な声に覚えがあり、何よりアイツの瞳を見てしまったのだ。

いつもは前髪に隠れて見えない瞳がほんの一瞬、刹那の間もあったかさえも分らない一瞬。本来、その目を視認することなど出来るはずもない一瞬にその瞳の奥にあった絶望が見えてしまった。

私はアイツが去った後もその場で脳裏に刻まれたアイツの瞳を反芻していた。

本来見えるはずのないあの瞳を見ることが出来てしまったのは一重に姉さんの絶望の宿った瞳が同じように私の脳裏に刻まれていたからなのだと思う。同じ眼だったから気づいてしまったのだ……。

絶望を知らない者に、絶望を理解することは出来ない。絶望を理解できる者は、どんな形であれ絶望を知っている者だけなのだ……。

だから、姉さんもアイツを傍に近づけたのかもしれない。本人も無意識のうちに同じ臭いを嗅ぎつけたのだろう。

その後、両親に声をかけられて我に返った私は両親と一緒に姉さんの部屋に行って、姉さんから手術を受けるという言葉を聞いた。

両親はその言葉に飛び上がらんばかりに喜び、私も喜びながらも姉さんの眼に新たに宿った覚悟を見ていた。

両親が部屋から出て行き二人きりになったとき私は尋ねた。

「姉さん、アイツの絶望って何だったの？」

私の言葉に姉さんは軽く驚いた後に穏やかな笑みを浮かべた。

「分からないよ……。でも、絶望に向き合ってなお、いつもはああやって楽しそうにしていられるお兄さんを見たら私も同じようになっってみたくなったの。絶望と向き合ってなお、強くあれるよう

に。
」

その後、無事に手術は成功して私がアイツを無理矢理引っ張って姉さんの病室に連れて行って姉さんに礼を言われて面食らうアイツを見ているとあのときのような絶望の色は伺えない。

けれど、あのとき見た絶望はアイツのうちでくすぶっているのは間違いないだろう。

それから何となくアイツのことを気にかけている矢先に姉さんの様子がおかしくなって、問い詰めに言ったらアイツが誰かと付き合いだしたらしいということを聞いた。

姉さんがアイツに惹かれてるのは何となく分かっていたので姉さんが落ち込んでいた理由は分かった。それを聞いてから何だか嫌な気分になったのは姉さんを傷つけられたからなんだろう。

けど、いつもならアイツを張り倒しに行くはずなのに何故か今はアイツに会う気がしない。顔を見るのが嫌というわけではないのだけど、何となく顔を合わせずらい。

そんなわけで昨日から胸のうちの嫌なモヤモヤを吐き出すことが出来ずため息ばかりついている。

「……はあ。……ん（え）？」

学校に登校して自分の席に座ってため息をついていると、同じようにため息が誰かと重なり思わずお互いの顔を見合わせた。

一人は右隣に座る恐らく紅チビのことで憂鬱な私の大切な姉さん。体調は手術のおかげか学校にこられるほどよくなったのだが、アイツのせいで気分は優れないようだ。

で、もう一人は私の左隣に座る紅葉 冬琉。隣になってまだ短いがいいつとはそりが合わない。常に冷めた目線をしているのが気に食わない。

「・・・溜息つかないでくれる？こっちまで鬱になってくるんだけど。」

「そういうあなたも溜息をついてるじゃないか。」

「乙ちゃん、そんな風に言ったらダメでしょ。」

私が文句を言うのと冷めた口調で言い返してきたので、更に何か言おうと思ったが姉さんに止められたので止めた。

「シスコン。」

シスコンの何が悪い、この冷血女。

「かぐやは昨日もそうだが、乙まで今日は溜息とは何か災害の前触れか？」

「どういう意味よ？」

「あなたが溜息をするのはそれだけおかしいということだが？」

「喧嘩なら買っわよ。」

「生憎、売っていない。」

その態度がむかつくので私も言い返すことにした。

「そういうあんたも溜息をつくなんて今日は雨でも降るんじゃない？」

「確かに今日の天気予報によると午後から降るらしいが、私の溜息との因果関係はないと思うのだが？」

「乙ちゃんが言いたいのは多分、雨じゃなくて槍が降るだと思います。」

「なるほど。それくらい私が溜息をつくのがおかしいと言いたかったのか。」

「……………ちよ、ちよつとの間違いぐらい誰にだってあるじゃない。」

「それはともかく、何か悩みがあるなら聞くが？」

「あ、いえ、たいしたことじゃないんです。ちよつと失恋しちゃいました……………。」

姉さんがそう言った瞬間、何人かの男子が反応したのを見逃さず睨みを効かせて置いた。姉さんは美人なので編入した直後でも病弱な人特有のその儚げな雰囲気もあって既に人気があるのだ。

「かぐやほどの女が片思いとはいいい男なんだろう。」

「どうでしょう?。」

「どうでしょう・・・? 惚れてるのдар?。」

「そうですね、何と言いますか、最初は何となく話しやすい人で気がついたら何となく好きになったんですね。だから、何かが特別にいいってわけでもなくて、けど何か惹かれるんです。」

確かに紅チビのいいところと言われてもパツと思いつくところがない。カッコいいわけでもなく、特別優しいわけでもなく、頼りになるわけでもない。

いい男かと言われれば頷くことは出来ない。アイツの周りにいた八夜と暦とかいう男なら外見だけならとりあえずはそうだと言えるだろう。

「まあ人の好みはそれぞれか。」

「でも、振られちゃいましたけどね、思いも伝えないうちに。」

「あんな奴なんかよりいい男はたくさんいるって。」

「いい男の人はいるかもしれないけど、お兄さん以上に好きになれる人は多分いないと思う。お兄さんは私にとって好きっていう感情を除いても特別な人だから。」

同じ絶望を知る者として? それとも、勇気をくれた人として?

「乙ちゃん、昨日、お兄さんに会ってきたでしょう? それで乙ちゃ

「んも落ち込んでるんでしょ？」

「別に落ち込んでなんかなくて。ただ姉さんを傷つけたアイツがむかつくだけ。」

「でも、いつもの乙ちゃんだったらお兄さんにイライラをぶつけてるよね？」

「……………」

確かにそうで、行かない理由が自分でもよく分からないので何も言えなかった。

「乙も女だったか……………」

「どういう意味？」

「どういう意味だと思う？」

何となくこの話題を掘り下げたら私のためにならないような気がしたので話題を代えることにした。

「あんたは何で溜息なんかついてたのよ？」

「……………はあ。」

私がそう言つと珍しく表情を変えながら疲れたように溜息をついた。

「いや、私の家は喫茶店を経営してるんだが母親がお気に入りバイトの一人と私をくつつけようとしてな。」

「あんたも男絡み？」

「そうなる。前々からそういうような雰囲気はしてたのだが昨日は色々あってな。それを堂々と公言してこれからはもっと積極的に私と彼をくつつけようと言ったものだからそれを考えたらしい溜息がな。」

「紅葉さんはその人のことをどう思っているんですか？」

「それは、その、嫌いではない・・・のだが、その、な？そういうのは、本人たちが、その、色々やってするもので、他の人間が横槍を入れるものではないと思うわけだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・偽者っ!？」

「やはりあなたとは話し合う必要性がありそうだ。」

だって、あの冷血女が恥ずかしそうに視線を彷徨わせながら齒切れの悪い口調で頬を染めるなんて有り得ないでしょ！

「紅葉さんはその人のことが好きなんですね？」

「す、好きか好きでないかで言えばだな。それは、その、まあ、すす、好きともい、言えないわけでも、ないが、そ、それは、ま、まあ、その、二択では、という話で、もっと、はっきり言えば、その、その、あの、す、すす、好きというか、何というかな」

「好きなんですね？」

「・・・・・・・・・・。」

姉さんがちよつと語気を強めて言うと、顔をさつきより赤くして小さく頷いた。

そのとき教室の一部で

「あ、あの氷姫こおりひめが誰かに好意を!？」「そんな馬鹿なことがあって堪るかあああ!！」「落ち着け!会員NO・008!まだそいつを消せば間に合う!」「我らの氷姫こおりひめを魔の手から護るのだ!！」「た、隊長!」「どうした!?会員NO・032!」「赤面する氷姫こおりひめが可愛すぎるでありますっ!」「馬鹿者おお!！」「へぶしっ!？」「氷姫こおりひめの美は何時でも輝いているのだ!氷姫こおりひめの全てに美を感じてこそ真の同志!表情の変化ごときで氷姫こおりひめの状態に区別をつけるものではない!！」「た、隊長!すいません!自分が間違っていました!ではこの携帯で取った赤面した氷姫こおりひめの画像は削除します!！」「待て!!それはよこせええ!!！」

・・・・・・・・・・小声で騒ぐという器用なことをする社会のゴミ共は無視することにした。

ちなみにそれに気づいたクラスの半数以上の女子はそいつらを白い眼で見っていた。

「応援してもらえるならそれにこしたことはないですよ。私みたいに失恋したら手遅れなんですから。」

「そう、だな。」

「私達も応援しますから。ね、乙ちゃん?」

「……まあ、振られて暗い空気だされても困るし、仕方ないから応援してあげるわよ。」

「……ありがとう。」

「別にあんたのためにするわけじゃないわよ。」

「乙ちゃん、照れてる。」

冷血女に礼を言われて顔を逸らすと姉さんが微笑ましそうに私を見ていた。

うん。やっぱり姉さんには笑顔が似合う。

おまけ。

「どうかしたか？ 雛？」

「いえ、何かどこかでまたトラブルの種が増えた気がしたんですが。」

「あゝ、お前のその手の勘ってよく当たるよな。」

そんなことを喋っていたいつもの三人だった。

第六話 一年生達（後書き）

久しぶりの更新になりました今回の作品はどうだったでしょうか？
今回は乙視点で前半部を回想、後半部を一年生達の様子を書いてみました。

アンケートの方ですが一票も返ってこなかったのもまた時機を見て再びやることにしました。それまでに読者数を増やせるように頑張りたいと思います。

ご意見・ご感想は随時お待ちしております。

第七話 気づいてみれば。(前書き)

今回は計3145文字です。

第七話 気づいてみれば。

昨日は『紅葉^{もみじ}』で色々ありましたが、今日も今日とて学校に来て授業を受けて、今は昼休みです。もちろん、昨日の二の舞を避けるために朝食は新聞配達の後には僕が作りました。

今日はかぐやさんに会うことが出来なかったので体調を崩したのではないかと心配になってしまいます。

体調が悪いと言えば

「葉月君、葉月君。」

「じゅー。ぐおー。ぐおー。」

「起きてください。」

「ごすつ。」

「んぐおっ!？」

「……雖、金槌は流石にまずいと思うぞ?。」

「大丈夫です。葉月君ですから。」

これぐらいで傷つく人ではないことは今までの付き合いで分かっています。

血が流れ出たりしてますが、葉月君はこれが普通です。

「そ、その根拠はどこから出てくる……?」

「そんなことはどうでもいいんです。」

「……何気に雛が一番俺の扱いがひでえな。俺のこと何だと思っ
てやがる。」

「ギャグ要員でしょう?」

「違うわ!!」

え? そうなんですか? …… まあ、どうでもいいですけど。

「そんなことより、皐月さんの様子はどうなんですか? 昨日は教室
から出て行くときに何だか様子がおかしかったみたいですけど。」

「俺の存在についての話がそんなことかよ……。あー、姉貴、
な。いや、ありや相当参ってるな。なにせ、あの姉貴が今日は俺よ
り遅く起きてきたんだぜ?」

「え? まだ寝ぼけてるんですか?」

「信じられないのは分かるが、自分で振っとしてその反応はないだ
ろ!? あと、俺はちゃんと起きてるからその振り上げてる金槌をし
まえ!」

ぐーたらダメ人間の葉月君よりあの生真面目な皐月さんが起きるの
が遅いなんてよほどのことがあったみたいです。

「剣道部の朝連も今日は休んだらしい。朝から部員がそのことで騒いでいたから間違いないだろう。」

「朝連もですか？何だか本当に心配になってきました。様子でも見に行ったほうがいいでしょうか？」

「いやいやいや、止めとけて。姉貴に止めを刺す気かよ。」

「確かに雛が行くと迂闊に止めを刺しかねないな。」

何だかひどい言われようです。

「ところで雛さんよ。」

葉月君がニヤニヤといやらしく醜悪で見るもおぞましい下卑た顔を
して僕に気持ち悪くにじり寄ってきました。

「何で近づいただけでそこまで言われなきゃならないんだ？」

「あれ？口に出てました？」

「思いつきり出てやがったよ。」

「なら、よかったです。」

「よくねえ！つつつか、わざと聞かせてたのか！？」

当たり前じゃないですか。

「ま、まあいい。で、雛。今日も昨日言ってた人と一緒だったのか？」

「はい？そうですけど？」

母さんは離婚をしたせいでまだ慌しいので落ち着くまで仕事は休むそうです。と言っても、一週間もあれば落ち着きそうで、すでに来週からのスケジュールも決まっているらしいですけど。

でも、何でそんなことを気にするんでしょうか？

「一晩中？」

「もちろんそうですけど？」

それを聞くと葉月君はニヤニヤした顔を更にいやらしく変えました。

「つつつことは、もうやることはやったのか？」

「やること？」

何かあったでしょうか？昨日は家に帰ってから、僕が夕飯を作ってその後は母さんと大家さんが僕の取り合いをして、母さんと色々とお愛のないことを話したり、大家さんが持っていたアルバム（『雛ちゃんコレクションNO.001』と表紙に書かれていて、撮られた覚えのない写真が何枚もありました。）を母さんと見ながら思い出話をしたりしただけなのですが？

「とばけんなよ。恋人と一晩中、一つ屋根の下にいらなったらやることは決まってるんだろ？」

「恋人？」

誰のでしょうか？

「……ちょっと待て。何かおかしいぞ。」

「……だな。いくら雛が鈍感だからって言ってもこれはありえねえよな。」

九陽君と葉月君の顔つきが変わりました。

「雛、昨日言っていた人物とは今日も一緒だったんだな？」

「さっきそう言ったじゃないですか。」

「その人と雛は相思相愛らしいな？」

「はい。そうですけど？」

「……お前、今、恋人はいるか？」

「いるわけじゃないですか。もてない僕に対する嫌味ですか？」

「……………」

どうしたんでしょう？二人とも何故かフリーズしているのですが。

九陽君も何でそんなわけの分からない質問をしたのでしょうか？

「「・・・・・・はあ。」」

二人揃って溜息をつかれました。何だかもの凄く馬鹿にされている気がします。

「雖、実はな。俺には相思相愛の相手がいるんだ。」

いきなり何でしょうか？

「その人と今日は一晚を同じ屋根の下で共にしたんだが・・・・・・、
どう思う？」

「えっと・・・・・・、おめでとうございます？」

いきなり恋人がいて、それなりに進んだ仲と言われてもこんな気の利かない台詞しか出てきません。

「俺とその人との関係は？」

「恋人じゃないんですか？」

「「・・・・・・はあ。」」

また溜息をつかれました。何だかイラつとします。

「雖、自分の発言を振り返ってみろ。」

えっと、相思相愛の人がいて、その人と同じ屋根の下で一夜を・・・・・・、あれ？えっと、その、つまり・・・・・・

「へあっ!？」

わ、わわわ!？えっと、つ、つまり、か、母さんとそ、そういうか、関係だとか、かか、勘違いされてますですかっ!？

「やっぱり気づいてなかったか。」

「雛らしいつつえば雛らしいけどよ……。」

「じよ、じょうしちえいつちゃくれりやかったんへふかつ（どうして言ってくれなかったんですかつ）!？」

「何を言いたいのかは何となく分かるが、最早言葉になってないぞ?」

「つか、雛の赤面するところなんて初めて見たぜ。」

「俺もだ。」

た、確かに、母さんは美人さんですけど、そ、その、れれ、れ、恋愛対象とは、べ、別で……っ!も、もしかして、皐月さん達もお、同じ勘違いを!!

「ふわっ!ふえっ!ふしゅ~~~~!!しゅ~~~~!!」

「お、おい、雛?大丈夫か!？」

「ふしゅあ~~~~!!」

「いでえええ!!か、噛むなっ!!手を噛むんじゃねえ!!」

「……羞恥心が限界を突破して野生化したか。」

それから数分の間、落ち着くまで葉月君に野生化したまま襲い掛かってました。うつつ、まだ顔が火照ってます。

「で、今、一緒に住んでる人は誰なんだ？」

ど、どうでしょうか？このまま勘違いさせるのはまずいですし、ちゃんと言ったほうがいいのでしょうか？うゝゝゝん、母さんが女優だと知らなければ大丈夫ですよね？

「えっと、そのゝゝゝゝ、……母さん、です。」

「「……あゝ、なるほど。」」

この二人は僕の母さんへの複雑な想いを知っているので割とすんなり納得してくれました。

「確かに雛が言っていた全部のことにあてはまっているな。」

「帰ってきたのか？」

「はい。……あの、もし会うことがあったとしてもくれぐれもあの時のことは秘密で。いつか話す時がくれば自分で話したいので。」

僕の傲慢で情けなくて罪深いあの時期のことは……。

「分かってるって。」

「雛がそう望むならそうするといい。」

あの時に得た無二の親友達はそう言っ僕の意味を尊重してくれ
ました。

「でも、雛の母ちゃんには興味があるな。」

「当然、会わせてくれるよな？」

……僕が女優、燈鏡 紅に関心を向けていたことは二人
とも知ってるわけで、会わせたら気づかれますよね？……ピ
ンチです。

第七話 気づいてみれば。（後書き）

というわけで、今回、男性陣は勘違いに気づきました。恥ずかしさのあまり雛が暴走しましたが、書いて面白かったので野生化雛は時折出せたらいいと思います。

ご意見・ご感想のほう随時お待ちしております。

第八話 ドナドナ（前書き）

今回は計4791文字です。

第八話 ドナドナ

親友二人の頼みを何とかはぐらかして放課後になりました。

「……行かないとダメですか？」

「当たり前だ。」

現在、僕は九陽君に担がれて連行されています。

九陽君、力持ちですね。それとも僕が軽いだけでしょうか。

なんて現実逃避を試みますが状況は変わりません。

何故、こんなことになっているかと言いますと、とりあえず誤解だけは解いておけ、という九陽君のありがたいような、ありがたいくないようなそんなお言葉を聞いて何かと理由をつけて逃亡をしようとした僕を九陽君と葉月君の二人がかりで拘束して、皐月さんがいるであろうという剣道場へ連行されているのです。ちなみに、葉月君は皐月さんの所在の確認のために先に行っています。

ああ、午後になってからの雨模様は憂鬱な僕の心を表しているかのようです。

ところで、この学校は剣道場に行くには一度、一階に降りて靴を履き替えてからじゃないと行けないようになっていて、放課後ということは当然、そこには部活に行こうとする生徒や帰ろうとする生徒がいるわけで、そんな中を学校でも有名なイケメンである九陽君に担がれながら行くのは大変目立つわけです。一種の羞恥プレイです。

へるぶみー、です。

そんな願いが悪魔にでも届いたのでしょうか。

「「「あ．．．．．」」」

そこに偶然いたかぐやちゃんと乙ちゃんに遭遇しました。このとき、神様なんて絶対にいないと思いました。

「姫夜姉妹か。丁度いい。一緒に来てもらえるか？」

ちつともよくないです。むしろ、悪化しています。

うつつ、かぐやちゃん達も母さんと僕の間柄を誤解してるんですよ？ただでさえ、皐月さんにも説明をしなくちゃいけないのに二人も増えるなんて．．．．．無理です。耐え切れませんですつ。羞恥で死ねますです！

「ふしゅつ~~~~~。しゃ~~~~~。~~~~~。」

「お、お兄さん？」

「．．．．．頭でもおかしくなった？」

「気にするな。で、来てもらえるか？これに関することで大事な話があるんだが？」

そんなに大事でもないと思いますです。きっと二人とも忙しいと思いますです。無理に誘うのはよくないと思いますです。

「・・・・・・・・はい。分かりました。」

「姉さんが行くなら私も行く。」

「ふみやあ~~~~~~~~!!?」

「あまり騒ぐな。暴れるな。」

に、逃げないとです！殺されます！羞恥心で殺されますっ！！

「姫夜姉は初対面だったな。八夜 九陽だ。雛の親友をやらせてもらっている。」

「あ、どうも。姫夜 かぐやです。あの、お兄さん、どうかしたんですか?」

「気にするな。ただ恥ずかしがっているだけだ。」

「はあ・・・・・・・・。」

言わないでください~~~~!!言われると余計に恥ずかしくなるです~~~~!!

「・・・・・・・・赤面するお兄さん・・・・・・・・、いいかも・・・・・・・・。」

「ね、姉さん?」

何か言っているようですが、それどころじゃありませんですっ!!恥ずかしいです!無理です!

「とりあえず、場所を移させてもらう。こつちだ。」

暴れる僕をしっかりと担いだまま九陽君は靴を履き替えて、僕の靴を持ちながら移動します。

その後ろを二人はちゃんとついてきています。今なら売られていく動物さんたちの気持ちが分かります。……もう、諦めました。

僕が逃走しようと努力をしているうちにその努力も虚しく剣道場まで辿り着いてしまいました。

「……何をした？」

「何もしてねえよ！姉貴のことを聞くために声をかけようとしたらいきなりだ！！」

そこには何故か簀巻きにされて一応、情けはかけたのか屋根の下に放置されている葉月君がいました。

「日頃の行い、か。」

あ、やっぱりそう思います？

「あの、こちらの人は？」

「その見知らぬ可愛い子！初めまして俺は」

「「社会のゴミだ（よ）。」」

「なわきやねえだろ！！というか、乙ちゃんには何で二回目にして社会のゴミ扱いされないといけなへばろお！？」

喚く葉月君の簀巻きにされている胴体に乙ちゃんの鋭い蹴りが入りました。

「名前で呼ぶな。虫唾が走る。あと、姉さんをいやらしい眼で見る奴は死ね。」

「えっと、それで、この方は？」

「おお！久しぶりにまともな反応をされたっ！」

「非常に残念なことにこいつも雛の親友の暦 葉月という。」

「テメエ！俺に失礼過ぎるだろ！」

かぐやちゃんの二度目の問いかけに渋々、苦虫を噛み潰したような顔で葉月君のことを紹介する九陽君に葉月君は何故か怒っています。

「初めまして、乙ちゃんの姉の姫夜 かぐやといます。先程は乙ちゃんが失礼な真似をしてすいませんでした。ほら、乙ちゃんも謝って。」

「何でこんな奴に。」

「乙ちゃん。」

「……………ゴメンナサイ。」

かぐやちゃんに言われて、棒読みながらも乙ちゃんが謝りました。

「やっと、やっとまともな人間が現れた！いや、女神が現れた！
！」

「今、ほどこいてあげますから待っていてください。」

「人の優しさが身に染みるぜ……。」

何か感動をしているらしい葉月君を助けようとかがやちゃんが近づき、縄に手をかけようと手を伸ばし

「……俺は暦の馬鹿っぷりが雛にうつらないか常々心配している。」

「八夜先輩、この剣道場に用があるのでしたら早く中に入りましよう。」

九陽君がボソツと呟くとかがやちゃんは何事もなかったかのように葉月君から離れました。

「見捨てられた！？か、かぐやちゃん、俺を助けてくれないのか！
？」

「乙ちゃんも何でそんな何もないところでボーっとしてるの？」

「俺の存在がなかったことにされてる！？」

「いい気味よ。あと、あんたが姉さんの名前を口にするな。汚らしい。」

「げふっ!？」

さっきの再現のようなことが行われました。

「乙ちゃん?いきなり独り言を言ったら変な人に見えるよ?」

しかし、今度はかぐやちゃんは咎めませんでした。

「……清々しいほどの無視だな。」

「何のことでしょうか?」

そう言ったかぐやちゃんの笑みをどこか黒く感じたのは僕の気のせいでしょうか?

「ところで、暦。暦姉は中にいるのか?」

「ああ。簀巻きにされている俺を一瞥してから無視して入っていったから間違いない。だから、助けてください。お願いします。」

「よし。じゃあ、中に行くぞ。」

「って、引きずるんじゃない!ほどこやがれ!」

「置いていてもいいんだが?」

「どうぞ遠慮なさらず引きずってください。」

その言葉に遠慮なく従って九陽君は僕を担ぎつつ、葉月君を引きず

って中に入っていました。

中では男子と女子が別れて練習していて女子のほうに向かっていき、その中で他の人達と明らかに動きが違う二人のほうへと近寄っていました。

あ、片方の人が面を決めました。

その後、礼をして下がるとお互いに面をとりました。負けたほうが皐月さんだったみたいです。

「調子が悪いみたいだけどお、どうしたのお？」

「・・・・・・・・すまない。」

勝ったほうの女性、防具に書いている名前を見ると彩華さんというらしい人がさつきまでの動きから想像できないほどのんびりした声で心配そうに浮かない顔をした皐月さんに話しかけていました。

「少しいいか？」

九陽君が声をかけると二人がこっちを向きました。

「八夜君とお、弟君とお、え〜とお、どなたですかあ？」

かぐやちゃん達はともかく、有名人の二人は知っていても僕のことには知らないみたいです。

「・・・・・・・・・・。」

皐月さんは僕のほうを気まずそうにちらちら見えています。気まずいのは僕のほうです。

「姫夜 かぐやです。よろしく願いします。」

「姫夜 乙……。」

さて、何で途中から僕の台詞がなくなったかと言いますと

「ふしゅ~~~~~。」

未だに言語機能が回復しないからです。諦めたところで恥ずかしいものは恥ずかしいんです。

「この野生化してるのは宝良 雛だ。諸事情でこんな風になってるが普段はまともな奴だ。」

「どうもお、彩華 睡蓮ですう。よろしく。それでえ、何の用ですかあ？」

「少し曆姉を貸してもらえるか？調子を取り戻させる。」

「出来るんですかあ？」

「確実に。手短にここで済ませる。」

「じゃあ、どうぞお。」

そう言って皐月さんを僕らに差し出してきました。

「さて、雛。」

九陽君が僕を下ろすと、僕はすぐに逃げ出しました。

「暦。」

「おうっ！」

「ふみゃ！？」

何時の間にか簀巻きから脱出した葉月君が僕を取り押さえ、羽交い絞めになると皐月さん達の近くまで連れて行きました。

「雛、たった一言、それだけ言えばいい。分かってるな？」

「うう~~~~~。」

「言っておくがそれまで解放する気はないからな。」

その一言が言いにくいんじゃないですか。

「ほら、言っちまえよ。」

葉月君が後ろから催促してきます。

前には何だろうかと僕を三対の瞳が見ています。

うう~~~~~。あ~~~~~。むう~~~~~。
~~~~~。

「・・・・・・・・・・・・・・・・です。」

「何だ？」

うつつ、皐月さん、何で今はこっちをちゃんと見てるんですか？

「・・・・・・・・・・・・・・・・じゃないです。」

「何ですか？」

かぐやちゃん、何で何か期待するような眼で見てるんですか？

「・・・・・・・・・・・・・・・・恋人じゃないです。」

「何よ？はつきりしないわね。」

乙ちゃん、何で若干口元が緩んでるんですか？

「・・・・・・・・昨日、言ってた人は恋人じゃないです。」

「「「本当に？」」「」」

首を縦に振って肯定しました。

「「「・・・・・・・・・・。」」「」」

ああ、黙らないで下さい。何か言ってください。

「・・・・・・・・・・紛らわしいのよ！紅チビ！！」

「げぶらっ!!」

覚悟はしてましたけど、乙ちゃんが本当に殴ってきました。ちなみに葉月君は僕が言った直後に僕を放して離れました。

「覚悟出来てるんでしょうね……?」

乙ちゃんは指を鳴らしながら僕のマウントポジションを取りました。

「…………出来るだけお手柔らかに。」

今日も気絶かぁ……。そんなことを思いながら拳を振り下ろす乙ちゃんを見ていました。

乙ちゃん、そんなに嬉しそうに拳を振り下ろして僕を苛めるのがそんなに楽しいんですか…………?

おまけ。

「そう、か。雖に恋人はいないのか。」

「嬉しそうですね。」

「べ、別にそういうわけじゃない。」

「そうですか。だったら、私がお兄さんの恋人になっても問題ないですよね。」

「……………」

「何ですか？お兄さんに対して皐月先輩はそういう感情は持っていないんじゃないですか？」

「……………雛は渡さない。」

「そうですか。でも、負けませんから。」

おまけ2。

「あれ止めなくていいのか？」

「彼女もいららない不安を抱えたんだ。あれくらいは許してやってもいいだろう。」

「いや、普通にもう雛の奴、気絶してるぞ？」

「雛なら大丈夫だろ。」

「……………まあ、いいか。」

おまけ3。

「ふん。」

「何だ？」

「あの子が皐月ちゃんのお、好きな子なんだあ。」

「そ、それはだな……。」

「ふん、へえ、あの子がねえ。どこがよかったのお。」

「いや、あの、その」

「真っ赤になっちゃってえ、かawaii。」

「うつ……。」

## 第八話     ドナドナ（後書き）

やっと誤解が解けました。その部分よりそこに辿り着くまでが長くなってしまうましたが、とりあえず次に進めようと思います。と言っても、まだどうするか決めてませんが・・・・・・。  
ご意見・ご感想のほう随時お待ちしています。

## 第九話

### 素顔の魅力（前書き）

計4572文字です。

## 第九話 素顔の魅力

お兄さんに恋人がいないと分かり、本当にホッしました。

けど、そうすると当然、ある疑問が浮かび上がってきます。

お兄さんが言っていた人は誰なのかという疑問です。

それをお兄さんに聞きたいのだけど、乙ちゃんが嬉しさのあまりお兄さんを気絶させてしまったのでお兄さんが起きるまで待つことになりました。

皐月先輩、お兄さんに好意を抱いているあの人に対して牽制の意味であの人の前でお兄さんに膝枕をしながら剣道部の練習を見ていると、さつきより素人目で見ててもあの人の動きがよくなっていて彩華先輩から何度も一本を取っていました。

皐月先輩がこちらをたまに見てくるのでそのときはわざと見せ付けるようにしています。

私の隣にいる乙ちゃんも私に膝枕をさせるのが嫌だと言っていたけど、どこかでお兄さんに対する好意があつて無意識の内に嫉妬している。乙ちゃんには悪いけど、お兄さんに対することだけは私は一切の遠慮はしたくない。

別のほうに視線を向けてみると葉月先輩が女子部員の方々と楽しそうに談笑していました。

先程は簀巻きにされていたのにどういうことでしょうか？

「あれが普通に扱われてるのがそんなに不思議か？」

壁に寄りかかって腕を組んでいる八夜先輩が私が不思議がつているに気付いたようです。

「まあ、あれは性格は少し変なところはあるが顔は悪くない上に運動も出来るからな。嫌われる奴には嫌われるが、一般的にもてるほうではあるんだぞ？さっき簀巻きにされていたのもたまたま嫌われてる奴に当たっただる。」

「あんなのがもてるの？」

乙ちゃんが心底不思議そうにした。

「姫夜妹のようにあれが受け入れない奴から見たらそう見えるだけだ。それに姫夜妹が言うほど、あれも悪い奴じゃない。でなければ俺や雛が親友扱いするわけないだろ。」

「親友、ということは先輩達は付き合いは長いんですか？」

「いや、そうでもない。中学三年の頃からの付き合いだから大体二年ほどになるな。暦に関して言えば、出会ったのは同じ時期だが中学が違って高校で偶然、再会してからだから一年だな。」

「では、何かきっかけでも？」

「……まあ、そういうことだ。」

八夜先輩は具体的にそのきっかけについて話すのを拒否する雰囲気

を漂わせながら肯定しました。

しかし、どうしても気になることがあります。

「あの、先輩は、お兄さんの、何か、その、不幸な事件、とか、そういうことは、ご存知でしょうか？」

お兄さんが抱えた絶望。親友の八夜先輩ならその何かを知っているのではないかと思いました。

「・・・・・・・・。」

八夜先輩はジッと私の顔を見つめていました。

「・・・・・・・・なるほど。てつきり雛の素顔を見たのかと  
思っていたんだが、姫夜姉はそちら側から雛に関心を抱いたのか。」

「ということは、何か知っているんですか？」

「雛の暗い側面を知っている。その原因と辿った過程は本人の口から、そして、結末は実際にその場に居合わせたからな。それが俺たちが親友になったきっかけでもある。しかし、それを俺等が話すつもりはない。こういうことは本人から聞くものだろう？」

「そう、ですね・・・・・・・・。」

確かにお兄さんの心の深い部分を知るに当たって他人から聞くことというのは考えが足りませんでした。

「それに、さつきは結末と言ったが、実際その手の問題は一生本人

に付きまとうものであり、今は小康状態であるだけで雛の中で何時再燃するか分からない。だから、姫夜姉妹も本人が話すまでその手の話題は控えてもらいたい。」

絶望と一生付き合わなければならないのは私自身よく知っています。私も少しは改善されたとはいえ、この制限の多い体と一生付き合わなければならぬし、他者と比較して不自由な体にまた何時絶望するか分かりません。

「はい……。」

「それは分かったけど、あんた、さっき紅チビの素顔がどうか言っただけだった？」

乙ちゃんが重くなった空気を察して話題を変えた。

乙ちゃんは口は少し悪いけれど昔から空気を読むことが出来る子だった。

「ああ、それは実際にいい例があそこにいる。」

八夜先輩が指を指す先には皐月先輩がいました。

「暦姉も最初は雛に対して他大多数の男たちに対してと同じ、あまり関心を示さない態度だったんだが、雛の素顔を偶然見たとたんにコロツとな。それが確か一ヶ月ぐらい前だったか。」

私より後にお兄さんのことを好きになったんですか。

「それより前にも雛の素顔見た奴らがいるんだが、あいつらも雛に

対してだけ態度ががらりと変わったからな。まあ、しかし、本人は態度の変化を自分の顔立ちが珍しいからとしか思っていないみたいだが。」

「顔立ちが珍しい？」

「その髪もそうだが、雛は変わった血を引いているらしくてな。まあ、言うより見たほうが早いとは思うが、今は髪をどけても寝ているし眼が見れないから分からないだろうな。」

乙ちゃんは何かを思い出すようなそぶりを見せた。

「……………そういえば、こいつの眼の色、黒じゃなかったような。」

「乙ちゃん、見たの？」

「見たと言えば、見たんだけどチラツと見えただけだし別の印象が強くてよく覚えてない。」

「眼の色はともかく、雛の素顔が人を魅了するということは実物を見てみれば分かる。」

「……………それは見る、ということですか？」

「好きに解釈してくれて構わない。ただ、起きている間は雛は恥ずかしがって見せはくれないぞ？」

私の膝の上でスヤスヤ眠るお兄さんの顔を隠す綺麗な紅い髪。その向こう側には一度も私が見たことがない人を魅了するという素顔。

・・・・・・すごく気になります。

しかし、お兄さんに無断で見えていいものなのでしょうか？八夜先輩の言うとおり、私も何度か見せて欲しいと頼んだことがあります、恥ずかしがって見せてくれませんでした。本人が嫌がっていることを了承を得ないうちにするというのは気がひけてしまいます。けれど、今の話を聞いて気になって仕方ありません・・・・・・。

・・・・・・偶然の事故ってよくあると思うんです。だから、お兄さんの髪を撫でてあげようとしたら誤ってお兄さんの前髪をどけてしまうようなこともあると思うんです。そう、今から起こることは事故なんです。

ゆっくりとお兄さんの前髪に手を伸ばして、そつと左右に分けました。

「・・・・・・。」

・・・・・・わあ。  
あ。

え？え？お兄さん、私より一つ年上ですよ？男性ですよ？何ですか？この可愛らしすぎる顔？天使？お兄さん、天使ですか？というか、肌白くないですか？私みたいに病弱な白さじゃなくて健康的で眩しささえ感じる程に白いじゃないですか？わ、柔らかい。え？え？何ですかこのもち肌。触って凄いい気持ちいいんですけど？ああ、その顔でむずがゆそうにされたらたまらないんですけど？唇も鮮やかなピンクでふつくら柔らかそうでいて可愛らしさの中に引きつけるような妖艶ようえんで淫靡いんぴな艶つやまであるんですけど？え？え？これい

いですか？襲っちゃっていいですか？いいですよ？じゃあ、いただきます。

「ストップだ。姫夜姉妹。」

お兄さんの唇に自分のものを合わせようとしたところで八夜先輩に止められました。

「あ、わ、私、い、いいい、今っ・・・！！」

乙ちゃんが顔を真っ赤にして私と同じく近づいていた顔を離れた。

今のうちに唇を

「待てえ！そこ何をしている！！」

大声が聞こえたのも無視してお兄さんとキス

「姫夜姉。やりすぎだ。」

八夜先輩に肩を掴まれて、上体を起き上がらせられてしまったせいでギリギリで出来ませんでした。

「放して下さい。」

「寝込みを襲って雛に嫌われてもいいのか？」

八夜先輩にそう言われて、ハッと眼が覚めました。

あ、危なかったです。つい魅力に負けてとんでもない過ちを犯すと

ころでした。

それにしても、お兄さん、その顔は反則です……………。

もう一度見たら、また襲ってしまいそうでお兄さんの顔を見ることが出来ません。

隣を見ると乙ちゃんも同じように顔を赤くしたまま下を見ないようにしている。

「かぐや！今何をしようとしてい、た……………」  
……………」

面を外して怒りながらこちらに来ていた皐月先輩は近くに来て私の膝のほうに視線をやると固まってしまいました。

その気持ち、凄い分かります。襲わないだけ凄いと思います。

「皐月ちゃんどうかしたあ？……………わあ、可愛い。」

その向こうから彩華先輩もやってきて、私の膝で晒されているお兄さんの素顔に頬を染めました……………というか、よくそんなに平静でいられますね？

更に周りを見ると騒ぎを聞きつけた女子剣道部員の方々が皐月先輩と同じように硬直していました。中にはぎらついた眼で鼻息の荒い人までいます。

「葉月、手が空いてるなら雛の顔を隠せ。」

「お前がやればいだろうが。」

「いや、手を放したら姫夜姉がすぐに雛に襲い掛かる。」

頭では分かっているんですが、体のほうは未だにお兄さんの唇を狙っているようで体を倒そうと力を前に向けたままです。

「ったく、そもそも雛の顔を見せんじゃねえよ。」

「すまん。まさか寝顔でもこれだけの威力を持っているとは思わなかった。」

「……………起きているときのほうが威力が高いんですか？」

葉月先輩が前に来て、私の膝の方で手を動かすと皆さんの硬直が解けました。

「もういいぞ。」

恐る恐る膝の方に眼を向けると、そこには顔をいつものように髪で隠したお兄さんがいました。

そこでやっと力が抜け、八夜先輩も手を放してくれました。

「まあ、これで俺が言ったことは身をもって分かっただろ？」

「はい……………。これは、危険すぎますね。」

「……………ねえ、さっき起きてるときのほうが凄いいみたいなことを言っただけだった？」

乙ちゃんが顔を赤くしたまま私も気になったことを聞いた。

「少なくとも俺と暦はそう思うが、同性の暦姉の意見のほうが参考になるんじゃないか？」

この場の全員の視線が皐月先輩に向かいます。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・倍以上の威力はある。」

「「「「「「・・・・・・・・・・（ごくりっ）。「「「「「「」

皆一斉に唾を飲み込みました。

「・・・・・・・・お兄さんの素顔は永久非公開にしましょう。」

そう決意をしました。

おまけ。

「あれじゃああ、皐月ちゃんが好きになっても仕方ないねえ。」

「・・・・・・・・・・彩華。まさか。」

「うーんとお、どうだろお？確かにい、可愛いけどお、恋愛感情かは分かんないかなあ？」

「・・・・・・・・。。。」

おまけ<sup>2</sup>。

「わ、私、あ、あいつに、き、ききき、キス、し、しようとした・  
・・・・・・・・？」

困惑する少女。

おまけ<sup>3</sup>。

そのあとの相談で雛は女子剣道部の共有財産兼マスコットに決定した。

## 第九話

### 素顔の魅力（後書き）

あれ？雛がの台詞が一言もなくね？と思いました。それはそれでいいかと思いつながら出来ました今回の話では雛の素顔が寝顔でですが公開という形になりました。どういう風に描写すればいいのかわからないながらも頑張って書きましたがどうでしたでしょうか？  
ご意見・ご感想のほうは随時お待ちしております。

第十話 帰路での追及（前書き）

計2523文字です。

## 第十話 帰路での追及

僕が気絶している間に何があったのでしょうか？

何だか皆の僕を見る目が変化しているような気がします。

特に乙ちゃんなんかはさっきからこちらをちらちらと真っ赤な顔で睨んできます。

な、何を怒っているのでしょうか？怖くて仕方ありません。

九陽君に聞いても誤魔化すばかりで何も答えてくれませんし、葉月君は女の子と話しているので聞くことも出来ません。

かぐやちゃんかというと、その話をするとなんだか眼の奥に危ないものを感じたので話を無理矢理かえました。

そんな何となく居心地の悪い空気の中で練習が終わるまでもう少しだったので剣道部の練習が終わるまで待つことになり、僕が退屈しないようになのか部員の方々が色々と構ってくれたりしてくれました。みんな、いい人達ばかりです。

そして現在、僕、九陽君、葉月君、皐月さん、乙ちゃん、かぐやちゃんの六人で帰路に着いています。

「で、誰なんですか？」

「それは、ですね。ほら、あの、あれですよ。」

「ちゃんと教えてくれないか？」

「その、えっと、何というか、ですね。」

「・・・・・・・・・・。」

女性陣から僕が言っていた人は誰なのかと迫られています。

乙ちゃんは喋ってはいませんが、僕の顔をジーっと見ています。・・・僕が視線を合わせるとすぐに逸らしますが、本当に僕が何かしたのでしょうか？

九陽君と葉月君に助けを眼で求めても無視されます。

だれかー、たすけてくださいー。

僕のそんな祈りが届いたのでしょうか。

「あれ？雛君？」

買い物袋を持った秋穂さんと出くわしました。

「秋穂さん、こんにちわ。お買い物ですか？」

「ええ。店のほうは夏春君に任せて夕飯の買い物。雛君は学校の帰り？」

「はい。あ、こっちは学校の友達です。」

って、あれ？何でみんな、秋穂さんをそんなジーっと見てるんです

か？

「誰、この人が例の人か？」

あ、そういう勘違いをしてたんですか。

「いえ、秋穂さんはバイト先のチーフで店長の奥さんです。秋穂さん、左から九陽君、葉月君、皐月さん、かぐやちゃん、乙ちゃんです。」

「どうも初めまして、皆さん。」

秋穂さんが挨拶をすると皆も挨拶をしたのですが、

「初めまして暦　葉月です！ いや、あなたのような美人と知り合えるなんて光栄ですよ。」

葉月君が秋穂さんにすりよって行きます。人妻にもちよつかいを出すその根性を叩きなおさないといけないかなとも思いましたが、相手が秋穂さんだったので少し同情してしまいます。

「どうですか？今度、おぢやつ——ッ！！！」

秋穂さんは笑顔のまま空いてるほうの手で近くに來た葉月君に見事な地獄突きを見舞い、葉月君は首を押さえながら転がりまわりながら悶絶しました。

流石は秋穂さん。容赦が微塵もありません。冬琉ちゃんもこういうところを受け継いでしまったのでしょうか。

「雛君、例の人って何のこと？」

しかも、何事もなかったかのように会話を進めます。……あれ？状況がむしろ悪化していませんか？

「えっと、ですね、その。」

「……もしかして、琴音さんのこと？」

何で言っちゃうんですか！？

「「「琴音さん？何か知っているんですか！？」」」

「なるほど、琴音という名前なのか。」

女性陣の食いつき方が半端じゃありません。九陽君も名前は知らなかったので自分より詳しくそうな秋穂さんに興味津々のようです。

「知ってるも何も昨日会ったばかりよ？」

「「「どんな人ですか！？」」」

秋穂さんは食いついてくる女性陣を見ると溜息をつきました。

「なるほど……。流石は雛君、といったところかしら。」

「どっという意味でしょうか？」

「そのままの意味よ。雛君は気にしなくてもいいわ。そのほうが面白いから。」

僕にとっては面白くないことじゃないでしょうか？

「そうね・・・・・・・・。彼女はすごい美人で優しそうないい人よ。」

「「「美人で、優しい・・・・・・・・」」」

「雛君よりだいぶ年上だけど、それでも私の前でお互いに好きだつて言い合つてて（家族愛的な意味で）愛し合つてるのが会ったばかりの私にも分かったわ。」

「「「年上・・・・・・・・、愛し合つてる・・・・・・・・」」」

何で僕を睨むんですか？というか、秋穂さん、わざと誤解するように言つてませんか？

「けど、まだ入り込む余地があるから私も大家さんも（母親の座を）諦めないわよ。」

「「「・・・・・・・・。」」」

・・・・・・・・視線つて時として言葉よりも雄弁ですよね。

「雛は年上趣味だったのがっ！！」

とりあえず、分かっているくせに余計なことを言う葉月君は蹴つておきました。

「そつえば、さっき、あつちで琴音さんを見かけたわよ？」

え？母さん、町をうろついてるんですか！？燈鏡 紅だつてバレたらどうするつもりなんですか！！

とりあえず、皆と別れて家に帰らせないと・・・・・・・・って、え！？九陽君以外いない！？

「もう全員、雛母を見に行つたが？」

「速くないですか！？そんなことより分かつてたなら止めてくれたらよかつたじゃないですか！？」

「俺も雛母に興味がないわけじゃないからな。むしろ、追いかけるのを推奨したいぐらいだ。」

「あら？あなたは知つてたの？」

「ええ。まあ、その人物が母親ということだけですが。葉月も知つているはずなんですが、あいつは美人という言葉に食いついたのでしょう。」

そうだつ！葉月君が母さんに余計なことをする前に駆除しないと！！

「す、すいません！秋穂さん、僕も失礼します！」

「俺も失礼します。」

「そう？じゃあ、雛君、九陽君、またね。」

手を振る秋穂さんの脇を駆け抜けて先に行つてしまつたみんなを追いかけてました。

おまけ。

「・・・・・・あの子達が冬琉ちゃんのライバル、ね。積極的そう  
な子もいたし、もっと冬琉ちゃんに発破をかけないと駄目かしら。」

企む主婦。

おまけ2。

「あ、これ雛に似合いそう。」

何故か女の子用の服を品定めしている母。

## 第十話

### 帰路での追及（後書き）

短めになってしまいました。次回の琴音登場の繋ぎとして書いたので中身もそんなになくて申し訳ありません。

ご意見・ご感想のほう随時お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7542e/>

---

宝良の日々

2010年10月10日11時57分発行